

此奴を殺して立つの外はない是れさへ殺せば別に最う怖い者も恐しいものもないと思を仇で返へす悪い奴奴を振上げまして忽ち之を振下して参りましたる時に流石に島司といへば武士花鳥の膝を枕に寝て居りましたが何にやら吸呼が變だと思ひましたから目を覺ましてヒョイと首を擧げて見ますると今振弱した刀がピカリと光りましたハツと驚き飛起きて突然花鳥の利腕を取つて押へまして暫時の間睨み附けます花鳥も吃驚り致して跡は口も能うさけませぬ位でござります大是れ何にござる乃公を殺すのか……ユヤッ不届至極の奴だ是れまで眼を掛けて痛つてやうたう某を難有いとも思はず殺すとは恐ろしい奴サツ貴様は今乃公の寢て居るのを幸ひに此劍を以て乃公を殺し島脱けでもしやうといふ所存であらう去すは故一人ではあるまい外に同類もあらうアツク隠男もあらう今汝を刺殺はいくとも安いことであるが今は殺さぬ後には身が鬪殺しに致してやる今命を助けて置くと同類を悉く取調べ夫れく所刑を致す可愛さ餘つて悪さが百倍是れまでの恩

義を忘却いたし拙者に對して刀を向ける悪ツくい奴」と襟髪を引掻き拳を振上げて二つ三つ切諫いたしました花鳥は固より膝の落附いて居りまする奴ですから是れは最う助からない此處で捕るやうな運勢では逆も島脱をしても命は助からない唯だ氣の毒なのは勝五郎三郎等の四人併し如何なる責苦に逢つても同類の名前を出す氣遣はない殺すなら殺せと腹の中に考へて居る此時喜三郎は何時の間にか椽の下にしのびこみ段々這ひ上つて裏手の方に廻り今蔵戸格子から覗いて見ますと何に致せ大助の側に鏡き刀物がありますから迂濶に手出しは出来ませぬ暫く様子伺ひ携へ來つた竹槍を以て壬生大助を殺し花鳥を連れて逃出さうといふ次回に申上げます

第十九席

借前回申し掛けました島破の件りで御坐います頃には七月十三日のことで御坐います花鳥喜三郎兩名にて島司壬生大助を切害に及びましてホット一息

吐いて居ります所へおふゆと申しますもの之れは玄若の女房で御坐います
 尤も島へ参りましたして夫婦に相なりました夫れが圖らず其處に尋ねて参りま
 する何かセカク致して居ります様子元とく只たの人間と迷ひまして女
 ながらも島へでも参つて居る位のもので御坐いますから氣に油断は御坐い
 ませぬ様子が變だと思ひます遊りが血だらけで御坐います故思はず喫
 驚致します喜三郎は傍らにあります例の壬生の劔で御坐います之れを引
 抜きまして殺さうと切掛けますと油断なく傍へにあります煙草盆の中の
 火入を取つて投付けます鏝元で受けましたから火入は破れて散亂致し喜三
 郎は灰を被りまして一時目潰を喰ひました其間に彼の女は裏口の戸を蹴破
 つて人殺しいッ」と叫びながら逃げて参ります際さす跡を追ひかけて参り
 ます月は冴渡りまして晝間のやうで御坐いますから逃げる姿は能う分りま
 す二人で追ひかけて参りますと横合から一人大の男子頼冠りを致し八丈
 鉞と申します鉞を片手に持ちまして逃げ行く女を横薙りに切ッ拂ひまし

たから血煙立つてトット倒れました兩人は何事やらんと追ひかけて参りま
 すやがて其男は冠物を脱つて去り兄か其方、玄若喫驚したセ酷ひことをす
 るぢやアないか甚なんの酷いことがあるものか此女が己達の悪事を訴人し
 やうと思ふのを追ッかけて来るのは和郎達二人に違えねエと思つたからア
 ツメ切つた此邪魔さへ拂へばモウ大丈夫だ安心しねエ玄若さん酷いこと
 をするヒヤアないか和郎の女房アア女房だつて足手まといになつて仕
 様がない今皆不齋庵に待つて居るから行かう」と之れから例の不齋庵に
 参りましたモウ勝五郎も豫て仕度を致し庄吉も仕度を致し右五人は銘々充
 分仕度を整へまして船を兄輪漕と申します處から漕出しました此兄輪漕
 と申します處は根山と申します山を後に致しまして見當と申します
 のは伊豆の大島の烟が見當で御坐います脊の口に雨もあがりまして如何に
 も風が良う御坐います見張のものに見附からぬやうキエロク致して迷
 に五人は船を出しました好い鹽梅に船は恙なく沖合に出ました船端の所に

庄吉が居ります勝五郎は海上が明るう御坐いますから梶を把ります各々に
 鹽水を掻きます桶と板子を一枚づゝ所持して鯛の間の所に三人は居ります
 庄吉有難てエマア何にしる良い月夜ぢやアねエか天の祐だせ之れぢやア首
 尾好く娑婆が見られるモウ餘ッはど出たか知らん」と庄吉振返つて見ます
 ると楳山が墨繪の如くポーツト向ふに見えます庄吉早いものだなア勝哥兄が
 日頃丹誠して呉れた帆の御蔭だモウ三宅島がアソナに遠くなつた随分に離
 れたせ」と一同は振返つて悦んで居りますと一人勝五郎は空を眺めて吃
 驚致します庄吉勝哥兄何を驚いて居るのだ勝「イヤ餘り天氣が好過ぎると思つ
 たら悪い雲が出て来たせ馬トソナ雲が降見ねエ楳山の後の方からあのつく
 芋見た様な雲が出たがあれが蝶々雲と云つて悪いのだ庄吉悪いかなア勝「此蝶
 々雲が出れば面倒だ支度をして置かねエ鹽水を掻かなければいけないせ庄
 「雨でも降るのか……風でも吹くのか勝「ことによると馬鹿暴風雨がするから
 ……ナアニ仕方かねエ元とく」生れた時ア別ツのだが死ぬ時ア一緒に死ぬ

と覺悟した五人だシツカリ眼を必めて御いでよ「あいや」谷自に眼帯をシ
 ツカリ必めました観るく内にかの蝶々雲が空一ぱいに擴がりました流石
 に日本晴のやうな天氣か悪悪を流したる如く真ッ黒に相ありました一時風
 は絶えましたから船は流れませんで一所に止りますと云ふ音で御座いま
 ので御座いまするヤガてのこと地底で「エーッ」と云ふ音で御座いま
 す何だなアあの音は勝「是れは是れぢやアとてもヤリきれねエアさうか」
 と見て居まする内に帆は忽ち風が當りましてバタバタと動いて居るか
 と思ふ内に烈風のために空中に巻上げられて仕まひます勝は中から折れま
 したから之れは槓を抜いて海中に流して仕まひました其内に「アーリッ
 と云ふ荒浪に相なりました流石にヂツトしては居られませぬ花鳥は鯛の圓
 の所にシツカリ囓り付いて俯向けになつて居りますアブリッ」水が這入り
 ますから一同は鹽水桶を持ちまして此鹽水を掻いて居ります何丈と高い高
 波のために空中に打上げられます時は天をも突抜けたかと思ふばかり又た

打下ろして参ります大波のためには宛然奈落の底に打込まれたかと思ふばかり揺られに揺られて居りましたが何分にも小さな船で御座いますから浪に逆らひませぬによつて何うぞ斯うを保つて彼方に流され此方に流されながら浪のために自由に船は動いて居りますトトウ夜ついで鹽水を掻き通して仕まりました如何なる大風でも夜の明方は一先づ静まるもので御座りますす穏かになりましたから一同は夢中で鹽水桶を持つたるまゝ皆な滑つて仕まひました勝五郎一人は正氣で御座いますから屹と起上つて空を眺めまするに空は眞つ赤で御座います勝喜三郎哥兄オ、勝庄吉庄オ、勝玄若主「オ、勝船は一處に止まつたせき恐ろしいア、驚いた随分大變のものだなア馬能く之れまで保つたなア併し之れは穩かになつたのか……モウ大丈夫かなア勝否や未だ穩かと云ふ譯には往かない一先づ静まつたが穩かにはならぬエきさうかなア已達には些つとも分らないが此空の赤いのは何だい勝此空の赤い奴がいけぬエきイヤに暖つたかいぢヤアねエか勝其暖つたか

いのがいけぬエ暑いのは違ふからき此處は何處だらう勝さつきから見て居るが皆無山が見えぬエ……トソだけ沖に出たか見當がつかぬエ斯う云ふ時に磁石か何かなければいかねエのだがソノ道具は持たず西か東か南か北か東西南北が分らぬエ何のことはない丸で赤い木鉢でも冠りました如く船は動きませぬし幾ら見ましても陸は一向に見えませぬからしてソノ位の沖に出たことやら様子が見えぬエ今に赤い奴が險香さんだからゲンシゲンといふヤツを突かれると助かる譯にはいかぬエきゲンシゲンといふのは何だ勝「でもなく波と波と層りあつて土手見たやうなものが出来るのだ之れはサキリと云ふ奴に掛つて来れば助からねエ鹽水を掻いた位ぢやア助からねエ何しろ腹を捲へやう」豫て用意して参りましたるスカリと申します網を取出して中に入れて置きませしたかの粟稗是れは團子に致しましたもの夫れに腰節を纏りまして青竹の中に眞水を詰めて持つて参りました是を以て

咽喉を濡はします。尊玄若てめエも食へま。トウして何にも食へない。太てへこ
 とはするが船は嫌ひなのだから……船位恐ろしいものはねエオレの嫌は船
 雷手先望辛なんぞトウも好かねエ。尊詰らあいのものと一緒にして居やがら水
 でも飲めま。何にも飲めねエ。臍まで吐いた溜飲の根絶した尊サアシツカリ
 仕度をしるよ。又たぞろ空を眺めて居りまする内に例のケンシグナを突き
 始めました。尊サア、裸だ着物を着ては居られねエ。真裸になつて腹帯をシ
 ツカリ結はひて。と死ぬ時に別にならぬ様にといつて。猿鼻揮を外つて。一ツ
 に繋ぎまして花鳥は下紐夫れを胴の間にシツカリ結はひ付けます。此船が沈
 んでも壊れても手を取つて死なう手を取合つて死なうと云ふので御坐いま
 すヤガて段々高く突き上げて参りました。ケンシグナは加はつて参ります。風
 のためにサギリとあつて掛つて参ります。以前の如く船は烈しく揺り出しま
 した。夫れでも一心で御坐いますから。鹽水を掻き通して居ります。一日之れだ
 けの沖に暴風雨を喰つて五人は居りました。が随分人間といふものは丈夫な

もので御坐います。何にしる木で拵へました船で御坐います。から沈むといふ
 氣遣は御坐いませぬ。壊れて仕まひましても其板子なら板子船の壊物から壊
 物につかまつて居りますれば沈む氣遣は御坐いませぬ。引繰り返ると云ふこ
 とは御坐います。が船は浮いて居る引繰り返しになつて居るだけのこと。ド
 ュして船が覆るであらうといふに水が一ぱいになりますれば其水のために
 覆ります。之れは水をあけるので水をあけて人間を殘せば宜う御坐います。が
 人間も一緒にあけて仕まひます。トウ、日もトツアリ暮れて仕まひました
 モウ五人共に七分通り死んで居るので御坐います。勝五郎は意地が強く死ん
 でも死に切れぬと云ふ了見の男で御坐います。から又たぞろ起上つて邊りを
 見ました。が眞暗で様子分かりませぬ。暫く兩眼を閉ぢて居りまして再び目を
 開いて海の裾の方をツツ見渡した所が星の如きの光りも見えませぬ。餘は
 遠に遠い所で御坐います。夜分沖合に出まして海の裾を見ます。と星の如
 きの明光でも見えませぬ。れば夫れを便りに溜付けます。がトツナヲ見ても眞暗

で分りませぬ馬庄吉馬オ、馬喜三郎シツカリしなよ喜オ、馬未人間死なよ
いせ馬死なよいかなア馬日が暮れたなア馬夜中だ喜今日の荒れも恐ろし
荒れたつた己なんぞ夢中で分らなかつたがとて今時分まで助かつては居
ない積りだつたが能くマア斯うやつてトウぞカウぞ息のあるのが不思議だ
セ馬處は何處か分らないかなア馬多分日本ぢヤアなからうと思ふ己の考ぢ
や吹き上げられた所が志州鳥羽邊りに吹き上げられる積りだがサウ説へた
具合にもいかねエと見へてヘンテユな異體の分らねエ所に來たセ」シーン
と致すと一口に申しますが之れが本當のシーンと致すので山奥に居りまし
ても木芽に風位は當る海の中は風さえありませぬければ大海は水の音は致
しませぬ夫れだけ廣い所に唯だ五人死掛つた人間が居るのですからシーン
と致して居りますると遠くの方で微かにようそろくと云ふ聲が風の便
りに聞えます様な心持が致しますので御坐います馬の聲は何だらう馬助
舟かも知れねエ馬其奴は難有てエ此二日の荒れで助舟が出て居るなら助け

て貰はうぢヤアねエか馬の船が十里先さか二十里先さか分らねエ聲が遠
くかどウだか……魂限り呼で見やう馬一生懸命呼んで見やう……サア庄
吉ッ喜三郎哥兄ッ立若ッ」助舟を呼ばうと云ふ一心は命の欲しいため左右
の舟楫に二人づゝ縋つて「助舟ヤイ」といつて呼たいが其聲が出ませぬ
ヤッくにして四人が揃つて「助舟ヤイ」と呼ました又たシーンと致し
まして更に物音も致しませぬ暫く経つと水音諸共間近の所に「ようそろい」
といふ聲が致しますので身の毛も慄ちヅツとして馬何だらう喜ありヤア助
舟ぢヤアねエアノは亡者船だ馬亡者船といふのは何だらう喜和郎達や己達
のやうに海で暴風雨を喰つて魚類の餌食となつたものが迷つて居てヤッバ
リ己達等を誘ひに來るのだ馬オ、怖いなア喜何の怖いも恐ろしいもあるも
のか」幸ひに喜三郎は三宅島から持つて参りました壬生の劔之れは名刀で
ありますから少しは魔除にならうと引き抜いて振廻して見ました途端にボツ
リくと降出して参りますエロくと云ふ雷で御座いまして電はピカ

リくと光りますやがて大風大雨に相なりましたによつてモウ丹誠が爲切れぬと落膽して其儘打臥しましたトウか波の穢みで舟は流れ出しました其間は更に夢中で御座いましてモウ一向に存じませぬ暫く経つてトーンと突付かつたやうな心持が致します船はバヤ〜に相なりまして胸の邊りまで水が参りました四人は死んで居るやうなもので御座いますから心附きませぬ勝五郎は岩角に突付かつて船が壊れ此處で死ぬことかと落膽致して首を擧げれば夜はほの〜と明渡つて鳥がガア〜ガア〜……鳥が啼くにしては里近いと一心になつて両眼を明いて見渡しますると茅屋根が散在見えするに上つてハテナ何處の島であるか知らんとヒョット傍を見ますると榜示杭に判然「下總國銚子伊賀伊根浦」とあります銚子伊賀伊根浦に吹き上げられました此五人の行末はどう云ふことになりませるか次回に委しく申上ます

第二十席

エーとう〜五人の者は恙なく島破りを致しまして途中難風に出遇ひ様々な難難を致しまして銚子へ吹上げられましたのが孰れも氣絶致して仕舞ましたたが喜三郎勝五郎は正氣で御座ます跡三人は皆氣絶を致しました是れをば喜三郎勝五郎の兩名で介抱を致しました所が漸々にして生命が助かりました先づ目出度いと言ふので其夜界限の漁夫の家や何かを頼みまして一日二日の休息を致しました又漁夫杯と云ふ者は自分が船へ乗りますのを渡世に致して居りますから斯る難風に出遇ひました者や何かは至つて愚に世話をして呉る者で御座います尤も島破り杯と云ふ大膽なことをした人達とは思ひません其處で五人揃つて居りますれば元々悪事を働いた人達いつ何時又御召捕に相成るまい者でもさいからと云ふので銘々分れ〜に相成りました喜三郎は一先下總佐原へ参りました餘所乍ら親母や親父にも遇ひ度し義理ある弟の吉次郎にも遇つて置き度いと思ひましたが去迎下總の國へ遣入りまして晝日中女を引張つて歩いて居る譯にも参りませんから夜分に成り

ましては五里でも三里でも歩く様に致して居ります。其日の路用や何かと云ふものは斯う云ふ人達に至つて其差支の無いもので、賊は儲きませんが只今と違ひ昔は國々に博徒の大親分が御座いました。夫れが皆以前心安う御座いますから内緒で尋ねて参りまして泊めて貰ひました。或は小使でも貰ひますから決して差支がないが併しどうも佐原の地へは思ひ切つて踏込ひことが出来ません。夜分に相成りまして成田の不動へ参詣を致しました。連も仕方がないから今夜は遅くも船橋へ往つて泊り翌日はどうか江戸へ往き度いと大和田の原を通り掛りましたのが昔の四ツで御座います。山梨が一張御座います。駕昇兩人が商人體の男に無心を言つて居ります。且那小共はね夜道を掛けて重い物を擔いで居るんで御座へます。並の酒代を御貰ひ申したのでは旨へ酒が一杯呑みません。二朱や四百の酒代なら小共の方から和郎さんに上まさら客斯う云ふ寂寥所に來て駕夫さんそんな否やなことを言はれては私も大きに迷惑だが併し私は年中此の海道を通り附けて居て遅くも

今夜成田迄やつて貰はうと思つて居るのだが成程夜更けて斯う云ふ宿寮所を擔がして來たんだ相當の酒代は上げ様から何も途中で無心を言ふには及ばない先へ往つてから……甲先へ往つて願ふ位なら此處で御願ひ申しやしません。ナア棒組之然ふよ。向ふへ往つて是れが酒代だと宛行扶持を食はされたつて仕方がねへ客。ア第一お前の方の望みはどの位酒代が欲しいと言はつしやるのか。甲別に望みと云ふでも無い。年百年中駕昇として居る御座には此の御客は幾許金を持つて居るか。十兩から先の金は肩の重みで分る。和郎さん。さん。ア百兩以上の大金を持つて夜道を掛けて歩いて居なさに違ひ無い。實は其懐にある路銀を客。ナニ。甲乙。悉皆酒代に貰ひ度へ。客人は吃驚致しました。後先を見ました所が人も通らず如何にも寂寥所。此の金を取られましては成りません。困つて居ります所へ後れ馳せにやつて参りました。男形體の大きな男で大きな廻し合羽を着て昔の三度笠を冠り脚絆甲掛草鞋履き銅金造りの長いのを一本差しまして西みんな大きに御苦勞だつた。甲親分此

處迄引連れて参りました馬ノイ若への和郎がマバ魔いたつて仕方が無へ實
 は今日和郎の跡を附けて来たのだ確に金を持つて夜旅をする人が来るなど
 思つたから此奴等兩人は言はい小哥の懐刀此の海道で年中盗賊をして人の
 物を只取るのが家業だ生命を取らうとは言はねへ金さへ出せば助けてやる
 夫れ共マバマすりや仕方がねへ三人掛りて一人計りの男をば魔ぐにやア
 及ばねへが生命を貰はなくちやならねへ生命が惜いと思つたら金を出しね
 へ寄、ハ、御尤様で御座います實は私は佐原の商人で御座います江戸へ家業
 の事で参りました取引を致しまして金子は成程仰有る通り百兩以上持つて
 居りますすが手前店も近頃は左りに成りまして此金子を貴君方に差上げま
 すと私一人が難義を致すのではありません兩親が路頭に迷ひます此金子は
 大切な金子で御座います有り餘る金子ならば貴君方に差上げますすがどうも
 是れは上げる譯に参りませんどうぞ不憚だと思召てお助けなすつて下さい
 まし馬ノイヤ助ける譯には往かねへ不憚だの氣の毒だのと云ふことを知つ

て居ちや盗賊は出来ねへ、マ、ア出して仕舞へ」纏て其の先の男は長い奴を
 引抜きまして例の商人の鼻先へ突出しました所詮是れは逃れぬことと思ひ
 まして例の旅人懐中の金を盗る氣に成りました丁度木蔭に之を聞いて居り
 ましたのが喜三郎花鳥で御座います夜目にも覗して見ますれば現在弟の吉
 次郎方々は笠を冠つて居りまして顔は判然分りませんが聲は忘れは致しま
 せん遺恨のあります馬差の菊藏で御座います是れは前々回にも申上げま
 した芝山の仁三郎の宅に置かしまして菊藏を殺さうと切込んで参りましたが
 運善く菊藏は逃去つて仕舞ひました實に根性の宜くない奴でありますから
 今では胡魔の蠅と相成つて居りますすが漸うく知れました二人は夫れへス
 イと出て是れく何を荒つばい真似をするんだ光つた物を差して居るの
 は菊藏ではないか勇エイ……己の名前を知つて居るなア誰だマウム今己が
 名乗つて聞かせてやる」喜三郎は冠り物をして居りますから顔は判然菊藏
 の方でも分りません喜和郎に遇ひ度くつて此の下總を少し迷子附いて居る

が噂に聞けば道樂者を止めて今ぢやア盜賊をして居ると云ふことをナラと聞込んだから夜でも遊んで居たら出會すだらふと内々尋ねて居た所折善く此處で出遇つたのも和郎の運命の盡きたのだ現在其處に過つて居るのは己の弟だ能くも己の弟を此處迄引いて来て金を出せと吐かしたなサア取れるものなら取つて見ろ」と喜三郎も豫て三宅島から持つて来た壬生の劍をスラツと抜いた駕夫兩人も是れは叶はぬと逃げ様とする奴を島破りでもする女でありますから突然花鳥が追駈けて参りましたが併し女の事此兩人は逃がして仕舞ひました菊藏も内々は逃げる了簡が御坐りましたが喜三郎の身體に隙がない併し此奴に遇つては一人では叶はぬ無理に逃げ様とする奴を喜三郎は突然持つて居りました刀で胸打に利腕を打ちましたからバツリと刃物を落して仕舞ひました組伏せて置きましてサア野郎和郎を一思ひに殺しちや合はねへ吉次郎確かりしる貴様の哥兄喜三郎だぞ喜「ハイ」トびつくりいたしておどくして居り升并何か縛る物は其處等に無へか否私の細

紐があるから是れでお縛りよ」聽て手足の利かない様に傍に大きな木がありましたから確かり夫れへ縛り附けました誠に身體は大きいが意旨地の無い奴で御坐います何を申すにも相手の駕昇は逃げて仕舞ひました假令ひ女でも相手は三人居りますからモウ斯うなりましてはさうすることも出来ません並菊さんお久し振りだつたね私が昔成田で年の若い時分に藝者をして居た時だつた五兩の金の爲めに大變に難儀をさせたね其時私を助けて呉れた此の喜三郎親方を大勢掛つて袋敵にしなすつたね其の意趣を返し度い爲めに今も親方の言ふ通り此邊等を尋ねて居たのに和郎も此處で出會すと云ふのは仕方が無いサア親方私も悔しいから十分に蹴り殺しにしてお呉れ」喜言はずと知れた此の野郎膽にしても歌ねへんだ」吉次郎は傍に居りまして之を聞いて居ましたが若し兄さんどう云ふ遺恨があるか知りませんがこんな者をそんな仕置にした所が別に譽れにも成りますまいからどうか善い加減にして生命丈けは助けてやつて下さい喜吉次郎和郎の金を奪ひ取ると

云ふ計りなら貴様が言はねへでも生命は助けてやるが遺恨のある此の野郎助ける譯には往かねへ和郎も知つてる通り己が斯う云ふ身體になつたのも和郎を相續人に仕度ため道樂者になつて今は自分の身體の置き所もなくなつたが併し此の野郎さへ殺せば外に望みはねへどうせ母親や父親には遇へぬへ身體どうぞ宜敷言つて呉れ此世ではモウお目に掛れんから千萬年の御壽命過ぎてからあの世でお目に掛りますと誓う言つて呉れ並貴君には初めてお目に掛りますすが私は虎と申します貴君のお兄さんには長い間お世話に成つて居りますので……言ふれでは貴君がお姉さん並左様仰有られては目次第もありませんが是れも何かの因縁でお互に苦勞を爲やつて居ります喜サア吉次郎己が遺恨があるから此奴を殺すのだ和郎傍で口出しをするな」と喜三郎は傍に縛り附てあります菊藏をとらへ其所で廻り殺しに致しましたのは自分が大勢の者に袋敵に遇ひまして辛い思ひを致しましたのも元は此の菊藏の爲め三宅島にやられて難儀をしましたたのも此の菊藏の爲めで

御坐います菊藏は手も足も出す其儘殺されて仕舞ひましたのは所謂自業自得で御坐います扱此所に何時迄も愚圖々々して居る譯には往きませんから喜三郎は吉次郎に向ひ成田迄送つてやるから今夜は成田へ泊つて翌日の朝立つが宜い」と久し振で遇ひました義理ある弟の吉次郎花鳥と三人で道々話を致し乍らトウ／＼其夜の内に成田へ這入りまして吉次郎は成田へ泊りましたが喜三郎は泊ることは出来ません吉次郎に別れを告げまして各残り惜み乍ら跡へ引返しまして百姓家か何かを頼んで其日は休をくいたしましたデ日ならず致して江戸表へ歸りました江戸表は八丁堀岡崎町と云ふ所に少々世話致した人が御坐りますから夫れを尋ねて参りました所が其人が頸に取持つて呉れまして花鳥と夫婦に成りまして岡崎町に裏屋住居をして居りました所がさう／＼人の世話にもなつて居られません只斯うやつて居ても仕方がない何か家業をしなければならんと言つて島破りをして來た人間が表向晝日中顔を隠して商賣をする譯にも往きません旨く姿を變へて

居りますから露頭を致しません段々困つて参りました或時夫婦が相談を初めました葎チーチエいと葎何んだ葎斯うやつてお互に睨めつくをして居たつても仕方が無いさう度々人の世話にもなれないから幾らか私がお金を拵へて来様と思ふんだがどうたらふ葎葎段する所があるか葎あるとも和郎も知つてる通り私が吉原に居て勤めをして居る時に日本橋の大文字屋の番頭を私が引掛けて置いたが随分鼻の下の長い男だから彼奴を救したら百や五十の金は出来るだらふと思ふ葎そんな嫌やな眞似は仕度くねへな葎何に構ふことは無い百や五十の金に困る奴ぢやア無い大文字屋の白風だから……何しろ一つ呼出しを掛けて見様葎ぢやア何しろ苦しいから葎葎して来て呉れ葎夫れぢやア鳥渡往つて来ますよ」服装が悪う御坐いますから損料で鳥渡小サツパリした衣服を借りまして界限の待合へ参りまして彼の大文字屋の番頭宇兵衛の所へ手紙を持たせてやりました只今でも此の大文字屋と云ふ家は歴然繁昌して居ります宇兵衛は何んにも知りません待合から手

紙が参りました見た様な手でもあるし飽めいたことも書いてありますから何思つたか店は風呂へでも往く積りにして幾許かの金子を懐中へ入れて例の待合に参りまして夫れから二階へ上つて見ますと自分の馴染の花魁花鳥が居りましたから吃驚致しました花鳥と云ふ者は豫て火附けをして送りになつたと云ふことを知つて居りますから葎あんだですか今手紙をお遣しなはつたのハ花魁に宇兵衛さん御無沙汰を致しました葎久しく御目に掛りません何んの御用があんなはるか知らんがこんな所から呼びによこされては誠に迷惑をする私に堅氣な身體成程見ず知らずの御方ではない吉原に居る頃は私も幾許かお金を使つて和郎の所へ通つたが夫れは賣物買物利郎さんは勝手な眞似をして居なさるが一體何處の者やら素性も知れない人に私を呼びに御寄越しになつた所が別に用はありません私はモウ歸ります少々御待ち下さいませい何も私は隠しは致しません女であり乍ら牢に這入りましたから恐ろしい奴だと貴君も思召もありませうが是れには色々深い仔細が

あります私元娼妓にありましたのも決して洒落や浮氣の譯では御座いません
 ャツた一人の母親が大病で薬餌の代や何かに差支まして女の事逆致し
 方なく身を洗ゆるの外はないと思ひましてトウ／＼あんな勤め奉公を致す
 様にありました其内母も間もなく没しまして外に頼りもありませんから
 つか善い御客様を勤めて身受けをして戴いて例へば手鍋を下げませうとも
 水仕業をさせせうとも堅氣で暮したいと思つて御客様を大切に居りま
 す所が茲に一人御武家様が私を御最氣にして下さいますから身分のある御
 方と思ひまして勤めて居りましたが私の目の届きませんのは年の往かない
 故でトウ／＼其方が吉原へ火を附けて就れへ送げて御仕舞ひに成りました
 か皆無往方が分らず其疑りやりで私が縛られまして色々御吟味がありました
 が元々私は火附を致した覚えもなし火附を致します露も御坐いません何ん
 で貴君あの大風に火を附けまして多くの家を焼拂つたり夫れに人に怪我を
 させて何んになりませうそんな恐ろしいことをさせんでも勤めをして居

られます御上の御役人様が貴様が付けた覚えがないと云ふならば其の附け
 た當人を出せと仰有つても先は男の事御逃げになつてから就れへ御逃げな
 すつたやら更に分りません所が白状しろ白状しろと殿しい御詮議でありま
 すが覺えのないことを罪に服することは如何にも残念で悔しふ御坐います
 から夫故我慢に我慢を致しましてトウ／＼三宅島へ流罪と成りまして其の
 難儀も一方ならぬ難儀を致しましたが全く潔白な私故御上様でもさうで
 はないと思召したとか御赦免とやらに成りまして此の度江戸へ歸りました
 が私が勤め奉公をして居る時分放蕩をして居る兄が大坂に参つて居りまし
 たが只今では此の八丁堀に居りますから兄の所を尋ねて暫らく厄介になつ
 て居ります貴君考へても御覽なさい大坂屋の花鳥が火附をしたと世間で申
 した所が本當にそんなことを致したなら今日歸て参られませうか、所で兄
 の厄介になつて居りますが此兄の女房が誠に邪慳な人で御座いますから世
 話になつて居るのも心苦しいことで何處へ願ふ處もなしト言つて今更又勤

め奉公をするのは辛う御坐います貴君は御深切な方善い御方と思ひまして
 私が只今御無心を申して御金を戴き度いと申す譯では御坐いません只兄の
 家に居りますのは瘠世帯なり氣の毒で御座いますから貴君にお助けを願ふ
 ので御座います」と誠にしくボロ／＼涙を溢して頼みました

第廿一席

元々花鳥には屬魂惚れて通ひました宇兵衛其頃は歎かれて居りました此處
 で亦涙を溢しまして頼みますれば望ハテな然うして見れば此女はそんなに
 悪心のあつた者ではない無實の難で縛られた者かも知れん可哀想者だ
 とソロ／＼自分も貰ひ泣を致しました望花鳥さん女酷い目に遇ひますつ
 たね全く然う云ふ悪事を働いたのではなからう何しろ考へて見ると氣の毒
 なことだね世に妾程不幸な者はありません其代り宇兵衛さん妾は是れか
 らどんな辛いことでも致します氣心の知れない人と一緒に居るのは辛う御

坐います貴郎ならお馴染のこと貴郎の御面倒はどんなにでも見ますから世
 話の出来るものならどうかお世話をお願ひ申します望夫れは私だつて和女
 一人位世話の出来ぬと云ふ身體でもなし眞底然う云ふ和女が了簡ならば世
 話もして上げ様し又和女の辛抱を見たら上で相當の所へも片付けてやりませ
 う……兄弟同様に成つて世話をして上げ様併し兄さんの所に居るのも辛か
 らうからマア宜い其内どうにか仕やう」是れから酒肴を取寄せました四方
 山の話をして手練手管で十分に宇兵衛を欺し込んだ娼妓は人を迷はせる
 様でなければ客取とは言へませんトウトウ其晩は右の怪しげなる家へ泊り
 ましたので御坐います翌る朝宇兵衛目が覺めて見ますと花鳥が居りません
 ハテな何處へ往つたかと枕元を見ますと自分の紙入煙草入杯が御座いませ
 ん紙入の中には三十や四十の金は持つて居ります女中を呼んで聞いて見ま
 すと今朝方早くお歸りになりましたが貴君が能くお眠つて入らしやつるか
 ら其儘にして置いて呉れと仰しやつて御坐いましたと云ふので又怪しく

なつて来たといつ迄待つても歸つて来ないから宇始めて欺された憎い奴だ……油断のならぬ奴だと思ひましたか仕方がない紙入の金を持つて往かれましたが近所のことであるからさうか都合を致して店へ歸つてブツク憤つて居ります當り所がないから小僧に計り當つて居ます宇掃除をし……イヤ何せ遊んで居るんだ手習をしる……小僧手習は隣の小僧に頼みました宇「手習を頼む奴があるか……御客様にお茶を上げる……」宇兵衛は小僧を叱り散して居ります所へ例の紙入と煙草入を持って一人の男が這入つて来ました喜御免下さいと出でなさいまし喜當家に宇兵衛さん云ふ方がお在なさいますか小あすこの帳場に座つて居るのが宇兵衛さんです喜一寸御目に掛り度う御座います宇宇兵衛さん貴君にお目に掛り度いと云ふ方がお出になりました宇ハア何んの御用ぢやか此方へどうぞお上んなさい喜御免なさい」と喜三郎は腰を屈めて帳場格子の所に参りました喜貴君が宇兵衛さんですか宇ハア私が宇兵衛……貴君はどちらのお方喜エー私は八丁堀岡崎町

に居りました魚賣の喜三郎と申します者で御座へますが昨晚私の妹が病妻と少々争ひ事を致しまして出て参りましたから了簡違ひでも致しやしないかと大きに心配を致して居りますと今朝歸つて参りました段々尋ねて見ますと旦那の御厄介になつたそうで誠に有難う御座います宇ハア花鳥は貴君の御妹子で……喜左様で御座います宇去る處からお迎ひにおよこして御座いますから私が夫れへ参つて段々お話を聞いて見ると哀れなお話をなさるから氣の毒に思ひましてお世話の出来るものならお世話をし上げて様と思つたのは元々私はおの人が吉原に居る頃の買馴染で御座います欺されるとは知りませんから随分便りになつて上げる積りであります……が昨晚泊つて今朝程お歸りになつた夫れは宜う御座いますか杖元に置いた紙入煙草入が無くなつて居ります紙入には聊か乍ら金子も入れてあります私の寝て居る内に夫れを持つて居なくなりました本来なら之を訴へて罪人に落さなければなりません私が私も堅氣の番頭主人持のことで御座いますからそんな荒

と掛合つて御在でなすつて居つた所が仕方ありません横合から口を出しては濟みませんが貴君のお顔の立つ機にしますから是れは私に扱はせて下さいませんか其怒入りますこんな私共見た様な者へ先生が仲裁に遣入つて下さいまして顔を立つて下さると云ふのは誠に有難いことで仲人は時の氏神とやら斯う云ふことはどうも小向ひでは話が仕憎う御坐いますから左様なら貴君に御任せ申します道イヤ夫れは早速御承知で有難い然らば此處で話も出来んから如何にも茅屋花が拙者の宅迄同道致して貰ひ度い其宜しう御坐います御供致します……チャア宇兵衛さん此の先生からお話を致します」春木道齋は煙草入を腰へ差し乍ら道宇兵衛をん心配をするには及ばん私が善きに取計らふからア安心をして居るが宜い其ハ何分願ひます」と両手を突いて春木に頼みました纏て春木は槍物町の宅へ喜三郎を連れて参りました衡門に致しまして玄關掃への小シママリした家で御坐います門には春木道齋と云ふ標札が打つて御坐います道今歸つた」取次の女中

が夫れへ出て参りまして女お歸り遊ばしまし道サア喜三郎さん此方へお上んなさい其御免下さい」とスツと奥へ通つて見ますと中々結構な家で御坐います其内茶や煙草盆が出ましたヌイと春木は立つて往きましたが喜三郎は煙草を喫み乍ら一人でポツチンとして何んと挨拶をするかと待つて居りますと纏て衣服を着代へまして煙草盆を下げ乍らヌイと夫れへ参りました道同じことだ敷物を敷いてお呉れ足が痛いから……私も御免を蒙るから……」纏て手を鳴しますと三ッ物か何かで夫れへ御酒が出る杯を指されましたから喜三郎挨拶を致して居ります道時に喜三郎汝も向洲の喜三郎じやアねへか大方苦し紛れでもあらうが往來の劇しい日本橋で島破りをしたの人数しをしたのと云ふ話をする奴がある者か餘り自失過ぎる話ちやアねへか和郎に遇ふのは初めてだが和郎の女房の花鳥と云ふのは私も顔を知つて居て話をすれば向ふでも知つて居る今はこんなことをして居るが元は天下の旗下で番町の御厩谷に居た梅津長門と言つた者が道樂者の交際が段々

満じて兄イとか親分とか言はれたのが面白さにトウ／＼邸を出て仕舞つたが併し向洲の喜三郎と云ふ名前には元から知つて居るからどうぞ私に任してお呉れ決して悪い様には仕無へ……と言つて梅津が掛合を附けて和郎の顔を立てさせ様と言つた所が高が商人の番頭で手強く掛合やア彼處の家を逐出させる計りた夫れも殺生だから是れはどうにか仕様から乃公に任せて呉んなアどうも恐入ります我々共がこんなメラシもないことを言つて揺り廻りめいたことをして居りますのを先生が斯うやつて扱かつて下さるのは何より私の幸福で實に御禮の申上げ様も御座いません何分お願ひ申します道「じゃア緩くり呑んで往きねへ」暫く話を致して居りましたが喜三郎は元是れが花鳥の情郎だ或は此の梅津長門の爲めに火を附けたと云ふことは自分も深く知りませんから氣の利いた男だと思つて居りました丈けのことでは坐います其内に金を二十五兩包みまして道喜三郎是れは和郎にやるのではない家へ花鳥に何か土産でも買つて往つて呉れ花鳥とは昔馴染だが決して

氣障な中ではないからそんなことを思つて呉れては困る己は花鳥が姻妓をして居る時分に彼處の樓へ遊びに往つて知つて居るのだが春木と言つては知れんが梅津と言へば知つて居る……今の話は翌日迄に噂を附けるから翌日和郎でも花鳥でも来て呉れよば宜いから……喜恐入ります左様なら是れはお貰ひ申します道マア緩くり呑んで往つて呉れ」さうかうする内に日の暮れる頃になりました道長座を致して相濟みません御暇を致しますと道が籠が来て居ります喜お手當で恐入ります道遠慮なく乗つて往きねへ實は日の暮方此の馴しい往來をノック歩かせ度ねへから駕籠を和郎に上げるのだ喜何から何迄御深切様に有難う御坐います」二十五兩の金を持つて歸つて参りました花鳥は首を長くして待つて居ります「親方此處で宜しう御坐いますか喜ア、此處で宜い是れは酒代だ甲彼方でお酒代も戴きました喜ア宜いから持つて往きねへ甲有難う御坐いますオノ棒組御酒代だ乙有難う御坐います喜大きに御苦勞だつた」花鳥は喜三郎の歸りが餘り遅いから凶事

はないかと實は心配をして居りました所へ喜三郎が駕籠に乗つて歸つて來ましたから安心を致しました五郎どうだね甘く往つたかね甘く往つたと思ひねへ併し己れも自失だから宇兵衛を脅かして百兩迄出させ様と思つたが春木道齋と云ふ素讀の指南をして居る人が仲へ這入つて呉れて色々其人の深切になつて御金迄貰つて來たが世界にやえらい人がある其人が和女を知つて居るせがへ……春木道齋と云ふ人は私は知らないが……喜三郎元番町の旗下で梅津長門と云ふ人だと言へば和女が知つて居ると言つたよ」花鳥は吃驚致しました此の梅津の爲めに火を附けまして三宅島迄やられましたのですから甚面白奴に遇つたねどう扱ふのか扱ひ様は依つたら私が梅津に掛合に往くことがあるよ」と翌日花鳥が梅津の所へ掛合に参りまして久し振りにて花鳥梅津と廻り合のお話は次席に申上げます

第二十二席

例の四人の中庄吉勝五郎で御座ります此二名は日あらず致しまして千住の宿へ参りまして折悪しく雨も降出して参りました小菅屋の門口を通掛りますると相變らず盛に繁昌いたして居ります近邊にて仄に様子を聞きまさればお熊重吉が夫婦で小菅屋の身代を乗取りまして何不足なく暮して居ります人盛ある時は天に勝つ天定つて人に勝つ一時繁昌いたして居りましたので御座ります永くついきません勝庄吉此家が乃公の生れた小菅屋の家だ庄中々立派なもんだなア勝何しろ和郎今夜客になつて先に登樓て入呉れ乃公は是れから女房や子供が何うして居るか探つて來るから遅くも乃公ア忍んで來るから先に登樓つて悉皆の様子を見といて呉れ庄吉ア兄哥急いで往つて來なせへ勝ウソ」豫て謀し合せて置きました庄吉は其夜客になりまして小菅屋の家に入込んで居ります勝五郎小菅村へ参りまして尋ねて見ますると自分の拵へました家はナヤンと致して居ります破れ果て人は居りませんが以前の家に相違御座りませぬ如何なる者が住つて居るか豈も女房が此

家をナヤンと持堪へて居る氣遣ひも無からうと思ひました。が門口まで参りますと小窓が明いて居りますから覗いて見ますと蚊遣の烟の爲に家は薄暗う御座ります。燈火もボンやり致し向ふむきにありました。女が顔に糸を操つて居ります。是れも以前と事變りまして姿も容も變つて居りますから判然女房だか何だか分りませぬが何うも我女房のやうな心持がして。吉や……お吉「誰だいな五月蠅ぢやないか又悪戯に來たのかい能く人の亭主の假牌を遣つちやア悪戯に來ると勝成程永へ間乃公が居ねへから近所の奴等が悪戯に來ると見えるシテ見ると女房に違へねへ能く達者で居て呉れた……乃公だ乃公だ勝五郎だ」周章て、飛出して参りまして表の戸をガラリと明けて言勝さんかい勝ウソ言何うしたい勝ウソ話しやア何方から話して宜いか譯が分らねへ能く達者で居て呉れた言マアお前も達者で宜かつたねへ」互に久振りで顔を見合してホロ／＼涙を飄すばかり暫くの間は無言で御座ります。勝五郎草鞋を脱いで漸う／＼上に昇つて言マア暑いから此方に

來で肌でもお脱ぎ何うしてお前婆に出来たんだ言「エッ……」とびつくりれねへが此七月十三日に島破りをして來たんだ言「エッ……」とびつくり勝何うせ乃公は命を捨てる積りで……運に叶つて難風を切抜けて再び婆に出来たといふのも一目お前に逢ひてへばかり夫れに和女は乃公が遠島にゐる時は懐胎だつたが子供は何うした言「大きくなりましたよ勝男か女か言男の子だと勝さうか……ハッになるナ言丁度八ッになりますよ勝名前は何と附けた言勝之助と附けましたよ勝マア夫れでも女の瘦腕で是れまで足手を延して大變の事だつたマア何とも彼とも禮の言ひやうも無へが然んな眞面目なことを言つて居ねへで和女だつて年が若へから子供を里にでも何でもやつて嫁縁口があつたら堅氣な亭主を持てば宜かつたのに言「イ、エ假令喰べる物を喰べないでもお前は眞實に悪いことをしたのでなく無實の難で彼んな所にお居でなんだから天道様は見通して何時か歸つて來なさるだらうと斯んな艱難苦勞をして子供の手を伸して今日が日までも待つて居ま

した勝さん妾は未だ夢の様な心持がするよ馬それに付いちやア子供は何う
 した言マア色々話があるんで小口から話さなけりやア分らないが御方便を
 もので世間でお前が悪いことをしたといふ人は一人もない勝五郎といふ者
 は全く無實の難で彼んな所に往つたんだといふので他人様が憐んで下すつ
 て……お前の島に往つた當座は稼業は無し妾は其時分は知つての通り仕事
 は出来ず針といふものは持てない人間だから遂うく人の門に立つて袖乞
 ひをしなければならんやうになりました夫れでも人様が亭主が彼んな所に
 往つて子供を喰へて居て女獨りで困るだらうと見ず知らずの人様まで色
 々義捐いで下すつて千住の青物市場の旦那方が大變に妾達を可哀想がつて
 下すつて幾らかやるから最う八つになれば使位は出来るだらうから市場に
 寄越して置くが宜いと此頃は毎日青物市場に彼の子は手傳ひに参りますよ
 何の役にも立ちますまいけれども皆さんが可愛がつて幾らか知らん持たし
 て歸してお呉んなさるし夫れに妾は斯うやつて漸うくマア機を織ること

や糸を繰る位のことには覺えたから兩人で稼いで居れば今日勝さん何うぞ斯
 うぞ細々にも送つて往けるからマア安心をして下さい併し是れまでの艱難
 といふものは随分並み大體のことでは無かつたよ馬さうだらうよ夫れでも
 マア人に人鬼は無へもんで斯んか放蕩者の悴を不憫と思つて皆さんが助け
 て下さる八つや九つになる子供が何の役に立つものか邪魔になるとも用に
 立つ氣違へは無へ是れも全く不憫と思つて僅ち物でも持して歸して下さる
 んだ是れといふも乃公が日頃青物市場の旦那方に可愛がられて居たか蔭夫
 れにお前が斯んなに堅くして居るから猶人様が助けて下さるんだ付いちや
 ア和女能く糸を繰つたり機を織つたりすることを覺えたか人間は苦勞をし
 て見なくつちやア分らねへ言随分言ふに言はれないことが幾らもある女と
 子供だと思つて人には馬鹿にされるし随分つらいくと死んで仕舞うと思
 つたこともあるけれども身貧に暮せば不憫が増し彼の兒が可哀想で彼の子
 を殺す譯にも往かず置いて逝く譯にも往かず子の愛に引かされて妾は今日

が日までの辛抱が勝さん出来たんだよ勝然うたらうよ和女然んなに困つたら乃公が産れた家は世間でも知つて居ることだし夫れに小菅屋の家は繁昌して居るんだから彼處に往つて何うかして頼んだら宜かつたらうに直然りやアお前妾だつて知つて居るから彼の子を連れて小菅屋の家に勝五郎が居りませんから子供を連れて誠に難儀でございませと云て……實は妾は往くのは嫌やだつたけれど春に腹は換へられず泣いて往くとお熊さんといふ母親さんが貴様の亭主の勝五郎は人殺しをして彼んな所に往つたんだから然んな者に掛ふと懸り合ひになると言つて突放され重吉さんとか何とかいふ今の御亭主が怖い顔をして妾親子を睨み附けて表へ突出さないばかり勝酷へことをしやがるなア直スルト彼處で番頭か何かをして居る彌兵衛とかいふ人が跡から駈出して来て誠に氣の毒様前の旦那がお在なされれば若旦那様……世が世なら其お子は大切かお孫様誠に御不憫で御座います何のお足しにもなりませんまいけれども是れは私の心ばかりで御座いますと……

勝さうか彌兵衛爺が……昔の者は剛氣だなア今に禮をするよ直夫れに付いては定めし彌兵衛さんが話でもしたと見へ彼處に居る女郎衆が見ず知らずの人だけれども若旦那が彼アいふ所に往つてお神さんが子供と兩人で困つて居ると大勢で幾ら宛か出しつことをして假令僅き物でもナヒイ〜當座といふものは彌兵衛さんが持つて来て下すつてドンナに妾は助がつたか知れないよ勝彌兵衛杯は乃公が子供の時分から世話をしてやつた人だから人間の當り前の話だが今は見ず知らずの奉公をして居る女達が夫れでも彼處の家の眞實の孫だと思ひ勝五郎の女房だと思へばこそ然うやつて義捐いで呉れる氣の毒千萬なとだ夫れに付けてもイナイマシイのは重吉夫婦人の家の身上を濡手で粟の攫取りにしやがつて彼れ丈けの財産を己の物にしやがつて夫れでも跡に残つて居る子供に一つ義捐うといふこともしねへ不人情……和女も知つてゐる通り乃公といふものは人殺しをしたんでも偷盜をしたんでも無へ斯んなことは和女も知つて居るだらうけれども親爺が死んでか

ら彼處の家の相續人に乃公がなる所爲られちやア彼奴等に不都合だ眼の上の瘤といふものは乃公より外には無へ何うかなして乃公を亡き者にしやうと人を縛るのが稼業丈けに重吉とお熊と相談をしやアがつて覺えも無へ證據を持つて出やアがつて人殺しの兇狀で永い間牢に入れ其上ならず浮世離れた三宅島といふ恐しい所に八年の間追ひこくられ米といつたら一年に盆と正月の二度ばかり海草や魚鱈の特性の分らねへ物粟だの稗だの取混せて大釜で煮た奴を喰ふのだが夫れだつて充分には喰へやしねへ奪ひちらがつて喰ふ有様は餓鬼道とも何とも例へ様が無へ水一杯も容易には飲まれねへ尤も上で命を取る所を遠い所にやつて下さるんだから固より良い筈は無へつれへ思ひや悲しい思ひは話に出来ねへ併し和女や子供が遠者で居て呉れたのが何よりだ乃公は實はの吉今日此處に来たのは和女に逢つて禮を言ひ子供にも何うぞして餘所乍ら暖乞して遠恨重なる小菅屋の家に今夜乃公は忍び込んで爺いと婆アとを鬮殺しにして最う島破りの科は重罪だ其上に

假初にも三日でも親と名の附いたか熊婆アを殺しやア蔑ら理があらうが命は無へ捕縛まつて又牢に敵ッ込まれて慘酷な眼に逢ふより此方から自訴する積り明日の朝遠山様の御門明きを待つて駈込み願ひをして速に罪に服して御法通りのお仕置に逢つて死ぬ積り乃公がお仕置に會つたといふことを聞いたらお願へた和女より外に線香の一本も手向けて呉れる者は無へから跡の所は頼んだぞ夫丈けのことだ最う何にも言ふことは無へ言情けないことだねへ久し振て歸つて来て……最うか前に逢ふことは出来なにかへ馬夫れも是れも因縁づく何うも斯うも仕方が無へ皆んな前世に悪いことをした報いが此世に報つて来た因果同志の寄合ひと歸めて呉れ唯だ是れから子供だつて和女の丹精次第で何うか放蕩者にしねへで青物市場の旦那方に頼み申して假令草鞋を穿て天秤を擔いで青菜小菜を賣つても宜いから堅氣の商人に育てゝ呉れよ夫ればかりが頼みだ決して子供を道樂者にして呉れるなよ言アイ豊乃公は最う往くよ言最う少しか待な今夜に限つた譯でも無か

ら彼處の家の相續人に乃公がなる所爲られちや、彼奴等に不都合な眼の上の瘤といふものは乃公より外には無へ何うかなして乃公を亡き者にしやうと人を縛るのが稼業丈けに重吉とか熊と相談をしやアがつて覺えも無へ證據を持つて出やアがつて人殺しの兇狀で永い間牢に入れ其上ならず浮世離れた三宅島といふ恐しい所に八年の間追ひこくられ米といつたら一年に盆と正月の二度ばかり海草や魚鱗の特性の分らねへ物粟だの種だの取混せて大釜で煮た奴を喰ふのだが夫れだつて充分には喰へやしねへ奪ひちらがつて喰ふ有様は餓鬼道とも何とも例へ様が無へ水一杯も容易には飲まれねへ尤も上で命を取る所を遠い所にやつて下さるんだから固より良い筈は無へつれへ思ひや悲しい思ひは話に出来ねへ併し和女や子供が違者で居て呉れたのが何よりだ乃公は實はの吉今日此處に来たのは和女に逢つて禮を言ひ子供にも何うぞして餘所乍ら暖乞して遺恨重なる小菅屋の家に今夜乃公は忍び込んで爺いと婆アとを弑殺しにして最う島破りの科は重罪だ其上に

假初にも三日でも親と名の附いたか熊婆アを殺しやア幾ら理があらうか、無へ捕縛まつて又牢に敵ッ込まれて慘酷な眼に逢ふより此方から自訴する積り明日の朝遠山様の御門明きを待つて駈込み願ひをして速に罪に服して御法通りのお仕置に逢つて死ぬ積り乃公がお仕置に會つたといふことを聞いたらお願へた和女より外に線香の一本も手向けて呉れる者は無へから跡の所は頼んだぞ夫丈けのことだ最う何にも言ふことは無へ言情けないことだねへ久し振て歸つて来て……最うお前に逢ふことは出来なにかへ馬夫れも是れも因縁づく何うも斯うも仕方が無へ皆んな前世に悪いことをした報いが此世に報つて来た因果同志の寄合ひと諦めて呉れ唯だ是れから子供だつて和女の丹精次第で何うか放蕩者にしねへで青物市場、旦那方に頼み申して假令草鞋を穿て天秤を擔いで青菜小菜を賣つても宜いから堅氣の商人に育て、呉れよ夫ればかりが頼みだ決して子供を道樂者にして呉れるなよ、ア、馬乃公は最う往くよ、最う少しか待な今夜に限つた譯でも無か

らうから切めて今夜一晩は此處に泊り明日彼の兒の歸つて来るまで……年
 が往かないから先様から心に掛けて雨の降る時は泊めて下さるから今夜は
 最う歸つて来ない故明日の晩のことにして久し振のことだから今夜一晩は
 つて明日彼の子の顔を見てからのことにしてお呉れな野産れで顔を見たこ
 とも無へ我子だ生中逢つて泣いたり笑つたりするより却つて見ねへ方が宜
 い生中逢ふと又死際に未練が残つていけねへ茲に金が二十兩ばかりある乃
 公は最う金は要らねへ是れは不祥の金ぢやアねへ下總から常陸に掛けて伏
 客の所に寄つて一晩でも泊めて貰ふとマア宜く来たといふので親分連中が
 十兩十五兩の小遣を呉れて立たして貰つた小使の餘りが二十兩あるから發
 育金といふ程のことは無へがマア子供の商ひをする時の資本にでもして呉
 れ宜十=彼の子は働いて呉れるし妾は内職をして借金といふものは無し贅
 澤さへしなれば今日に困る氣遣ひは無く暑くなく寒くなくして居られる
 から其心配には及ばない此金はお前持つておいでな野馬鹿なことを言へ乃

公は是れから駈込み願へをしてお仕置を受けるのに錢も金も要るものか僅
 な金だけけれども乃公の心ばかりだから取つて置け宜然うかい夫れでは彼の
 子の稼業の資本に是れは納つて置くよ勝資本といふ程のことは無からうけ
 れどもマアく預つといつて呉れ實は乃公も今夜一晩泊つて明日の晩でも宜
 いのだから庄吉といふ弟分を小菅屋の家に先にやつてあるから刻限を間違へ
 ても氣の毒だ夫れじやアお吉最う乃公ア往くよ言アイ勝達者で居るよ言ア
 イ勝最う逢はねへよ言アイ勝小供を頼むよ言アイ勝和女も身體を大事にし
 るよ言アイ 呆然立上りまして暫く考へて居りましたが上り端まで参りま
 すると女房が駈出して参りました男勝りのお吉でございまするが此亭主に
 最う生涯逢ふことが出来ないと思ひますれば流石女でござります勝五郎の
 兩手に縋りましてオイく泣叫ぶまでのことで御座りますクスくして
 居て女房子に難儀を掛けてはなりませんから野決して乃公の来たことを人
 に言ふなよ……ト」氣を取直して表に方の駈出しました勝五郎

第二十三席

扱て庄吉は小菅屋の權の客になりまして酒肴を誂へ内裏者の一人も揚げて
 宵の口は騒いで居りましたが好い加減の時分に切上げて樓の様子に眼
 を着けて居ります其中に四ツが鳴り九ツが鳴り吉原ならば最う彼は大引
 けの刻限に相成りますと裏手の方に廻りました勝五郎「ア、ア」と嘆拂ひ
 を致しますると庄吉障子をガリと明けまして庄勝兄弟か勝ウム庄丁度立
 い「豫て自分の生れました家で勝手も宜う存じて居りますから塙を乗越
 えまして容易に庇に上りまして二階座敷にノイと参りますと其晩登つた客
 も大概最う眠つて仕舞ひまして何處ともなく世間が寐寤と致して居ります
 雨は益々降出して参ります雨人共充分支度を致しまして長刃を引ッ下
 た儘下座敷に降りて参りました小菅屋の内所へ来て見ますると座敷に一杯
 の蚊帳が釣りまして蚊帳の中には酒や肴が取散してござります贅澤極まり
 ましたる舉動重吉お熊は一杯機嫌で寝入端勝庄吉「庄、オ、オ」勝之が乃公の

遺恨のある重吉といふ野郎にお熊婆アた乃公がア眠て居る所をグツサリや
 つちまへば雑作は無へが然んなことぢやア乃公の腹の虫が承知しねへ聞殺
 しにしなければやアならねへんだ庄吉其處を閉てといつて呉れ人が聞くと面
 倒だから庄合點だ蚊帳の四隅を切拂ひまして勝サア起るく「抜亦で頼を
 打ちましたから冷りとしたから驚いて重吉お熊起上つてヒョイト眼を開け
 て見ると異形の扮装の奴が胡坐を掻いて居りますからグツクして重泥坊
 と聲を立てやうとする奴を勝聲を立てあがるとブツッ斬るぞ静にしる偷盜
 ぢや無へんだ重吉暫く逢はねへなアお熊婆ア久し振りぢやアねへか乃公だ
 面ア覚えて居るだらう小菅屋の主人勝五郎が歸つて来たんだ重、オ、オ……汝
 は勝兄弟か勝兄弟かかしにするな——婆さん相變らず遠者だな熊勝坊や
 ア能く尋ねて来て呉れたノウウ勝何を言やあがる能く尋ねて呉れたも無へも
 んだ手前達に愚痴を言ふと思つて茲に尋ねて来たんだから決してサツク
 するにやア及ばねへ愚痴を言ふと言つちやア男らしく無へやうだが手前達

に一通り言つて聞かせなけりやアならねへんだ茲に居るなア庄吉といふ乃公が島で弟分にした男だ手前達のお蔭で見たことだねへ三宅島に八年居て随分面白へ思ひをした又半に這入つて手前達のお蔭で乃公は好い男にたんだ斯んな贅澤な暮しをしやアがつて是れといふのも誰のお蔭だや乃公の親爺が拵へた身上だ其親爺を邪魔物にして……夫れも乃公に言どりやア怪しいや毒でも飲まして殺しやアがつたんだらう又乃公が此家の跡取りで手前達には眼の上の瘤だもんだから僅かな證を拵へやがつて人殺しの兇状で差送つたのも手前の所業だな石を抱いたつて口を明くもんぢやアねへ身に覺えの無へのを白状する譯はねへや遂うく三宅島に遠島になつて艱難をしたんだ切めては手前達も人間の形をして居るなら是丈けの身上を乗取つて斯んな真似して居るならば跡に残つた婢アや子供の始末位したつて罰も當るめへに何故婢アを突出した婢アは赤の他人だが乃公の子供は眞の此處の家の跡取り息子親爺の爲にははんの孫だ夫に乞食の真似をさせ

て置きやアがつて百の錢も恵まねへ不人情の野郎餘んまり酷過ぎるから今夜返禮に来たんだ夫れも唯だ出て来たんぢやアねへ今こそ言つて聞かせるが此七月十三日に島破りをして上にお手数を掛けたくは無へが手前達に之を言ひてへばかりに来たんだ是れで乃公の溜飲も少しやア治まつた馬子、勝兄哥お前然んなことをして私が酷へことでもしたといふなア思ひ違へた何うぞ氣を落附けて聞いて呉れ乃公は上の役人にも出入りもする稼業だからお前が島破りをしたつて罪の輕くなるやうに旦那方に願つてやるめへもんでも無へ氣早なことをして亂暴をしちやア不可ねへ勝何言やアがるんだ今時分手前達の厄介になるものか勝勝兄哥お前心得違ひをしねへが宜い元々お前の家に逢ひないから妾達は何處に隠居をしてお前に此家を渡してやるから量見違ひをしてお呉れでない量見違へ箆棒奴量見違へなんぞするものか幾ら何を言はふが手前達の然んなイカサマを喰ふ勝五郎ぢやア無へ島破りの兇状のある人間だサア庄吉手を貸して呉れ——是れから兩人を鞠殺

しにするから然う思へ兩人「アソ助けて」と逃かゝる重吉は熊婆アの髪を提
 んで其處へ引倒し膝を立てられては面倒と口の中に手拭を押込みましたか
 ら膝を立てることが出来ません餘り惨酷な様でござりまするが如何にも悪
 い奴等とござりまするから庄吉勝五郎の兩名で重吉お熊を其處に於て毆殺
 しに致しましたのは是れ天命でござりまする餘りバツヤクサ音が致しま
 ら彌兵衛といふ爺さんが寝ぼけ顔をして手糊を貼けて来て見ると主人夫婦
 は血だらけになつて倒れて居り其側にキラ／＼光る物を疊に突ッ刺して兩
 人の大の男が胡坐を掻いて居りますから早腰を抜かして「アッ」と膝を立
 てるのを睨目にしろ——爺や久しく逢はあかつたなア乃公だ／＼乃公だよ
 彌然う仰しやれば見たやうさ……時姿も形も變つて居るからお前は忘れた
 か知らねへが乃公は小さい時分に抱きかゝへをして貰つたから能く覚えて
 居る大層白髪になつたなア……勝五郎は彌ア、若旦那何うもマア／＼能く
 お達者で……時能く達者といふ譯はねへ乃公が今夜見ねへ兩人を毆殺しに

しつちまつた何んにも言はねへ爺や此位のことを乃公がしても仕方が無か
 らうなア彌ハイ御尤でござりまする時何うせ乃公は生きて居る積りぢやアね
 へんだよ死ぬ量見でやつた仕事なんだ悪い奴等だお前は爺や好い人だ一つ
 家に永年女房も持たずに斯うやつて奉公をして居られる人だから働さもな
 ければ悪心も無へ人の言ひなり放題になつて居る人だ併し此奴等夫婦は万
 公の親爺の身上を乗取つて贅澤をしやアがつて乃公を彼アいふ所にやつて
 跡に残つた嫁アや子供に三文の恵與もしねへといふ奴等だ夫れでもお前は
 昔の主人だと思つて困つて居る女房子を能く面倒見て呉れたなア彌イエお
 世話所ではござりませぬ誠に届きませぬが私の心計り時イエ心計りといふ
 のが難有へ夫れに付いては此處の家の女郎や何か／＼心附けて呉れたさう
 だ今の女郎は乃公は見たことは無へ見す知らずの人達でせへ然んな話を聞
 けば憐んで僅き物でも恵與いで呉れやうといふ量見が出るのに此等夫婦は
 酷へ奴等だなア彌ハイ御尤でござりまする時此家は乃公の身代だからお前は

や家の勝手を知つてゐたらう蔵の錠を明けて金を出して呉んな異ハイ最う
 尊方の御存分に……時イェ存分だつて乃公が親爺の金を持つて往くのの不
 思議はねへ案内でし呉んな庄吉一緒に往つて呉れ馬オ、合點だ」是れから
 蔵の錠を明けまして悉皆ひ出ししましたが贅澤に暮して居りましたから金は
 澤山ござりませぬ用筆筒の抽斗に三四百兩の金子がござりました故之を取
 出し衣類は残らず廊下に撥出して仕舞ひまして寢て居ります奉公人を一
 同起しまして客の座敷に參つて居る者は願がぬやうに皆女子子供を呼起し
 ますと様子分りませぬが主人夫婦がズ〜に斬られて居ります所へ
 怖ない人が兩人居りますから何事やらんと女郎小女下女下男に至るまでカ
 ヲ〜保へて居ります時決して驚くことはねへ此金は乃公が持つて往つた
 と言へば宜いんだから此金を皆おに分けてやつて呉れ爺や是れをお前にや
 るからお前の小遣にしねへ爾私に金は……時宜いから取つて置きな夫
 れから女郎の年期證文があるだらう夫れを残らず出して呉れ」彌兵衛が女

郎の年期證文を出して來ましたのを今サア銘々に之を一枚宛渡して呉んな
 何うせ此處の家は潰れるんだから明日になつたら情夫の所へ往うと亭主の
 所に往うと親の所に往うと勝手次第和女達は歸してやるから勝手に思ひ通
 りの所に往くが宜い若し間違つて呼出されるやうなことがあつたら勝五郎
 から證文を貰つて暇を出されたといへば宜い外のことと言はねへでも乃公
 がお前達の罪にならねへやうにするから一同の奉公人に年期證文を遣は
 し夫れ〜金子を分けてやりまして贓着物が其装では何處へも往くことは
 出來めへから」と着類を引摺り出しまして先づ素人の装の出來るようにし
 てやりました時彌兵衛は事に依ると面倒だらう一度や二度は呼出されるか
 も知れねへが呼出されても賊が夜中忍び込んで新様〜でありましたと外
 のことは何を聞いても存じませぬといへば宜い乃公の方から申立つて置
 けり手前達にゆいわくをかける氣遣ひはねへマア達者で居るよ」悉皆もと
 分けて仕舞ひまして自分達兩人はツルとやら申しまする金子を懐ろに入れ

まして七のズイまで尻を引ッからげまして是れから支度をして往けば丁度
 遠山様の御門明さに駈込願ひさする時刻にならうと表に出まするとカア／＼
 と鴉が鳴いて居ります誰れが之を知られたものか重言の乾分が數名軒
 の下に待つて居りまして兩人の出る所を「御用口御用と」打つて蒐る女迂
 奴等に此處で縛られるやうな意氣地のねへこたアしねへんだマ／＼しや
 アがると片ッ端から獨ッ斬るぞ馬上に向つて手向ひをする不届な奴」と一
 同にドツと掛る奴を斬ッ拂ひ／＼千住の天皇の肚内まで参りまして此處で
 充分の支度を致し兩人が遠山左衛門尉様に駈ッ込み訴訟に及ぶといふ次第
 に申上げます

第二十四席

庄吉勝五郎は遠山左衛門尉殿へ自訴いたしました尤も其頃遠山様は御名幸
 行でござりました遠山金四郎様と申上げます兩腕に文身を彫つてお居で

になりまず先達て明治座で左團次が狂言致しまして作者の筆の働さか遠山
 様が下様のことを御探索遊ばす爲に下民と交りまして文身まで致したやう
 に作つてござりまするが去る方に伺ひましたが決して左様な譯でもないさ
 うでござります尤も金四郎様は漢學のあるお方でござります御親父左衛門
 尉お逝去に相成りまして頭の押へ手の無い所から殊更お若い故でござりま
 す遠山の若様で飛んで歩行きまして放蕩無頼の者と交際ひ吉原居芝町處々
 盛り場杯を頻に歩行するを此上もなき愉快と心得てお居でになり放蕩者
 の群に這入りまして御自分の身體に傷までお附けになりましたが大體馬鹿
 なお方ではござりませぬからして吉原に這入つて見ますると其比ひの遊女
 屋は甚しき悪弊がござりまして田舎の人杯が吉原見物に参りますると之を
 妓夫と唱へまする若い者が無理に引摺り揚げまして詠へも致しません酒肴
 などを莫大に取寄せ遊女揚代金杯も法外に食り取りまして附掛けを致した
 り杯いたしませぬ或は芝居町の役者共が横着に致しまして人の家内であら

うが娘であらうが女杯を部屋に引摺り込みまして金銭を食りますといふやうな甚しい行ひを致して居りますのが御自分の眼に餘りまして今まで斯る所業の者達を知らずに居たが恐ろしいことをするものである政治が行届いて居るやうでも役人達の届かぬ所があるからして斯る不届至極の真似を致す輩が多くある自分町奉行でも勤めて居れば其風俗を必ず直して吉原芝居町處々盛り揚に手を入れて改革せんければ國の耻になると御自分も願へりまして其時お心が附きましたのが遠山様のお任せ御改心遊ばししてお屋敷へ閉籠つてからといふものは放蕩懶惰の交際は致しませず唯勤物ばかりに目を配りまして日々考へてお居でになりますので御親族或は上方達へも徐ろく遠山様の改心遊ばしたのが分りましたる故に手廻がござりまして遠山左衛門尉と御任官遊ばしして町奉行を命せられましたのでござります此左衛門尉殿の御勅役中は吉原杯が悉く賤しうござります悉皆りと風俗を直しまして或は芝居町杯が淫りがましいことを致すことが出

来ません此時でござります役者といふ者は芝居町の外に住居を致すことが出来ません又平民と縁組を致すことがならん役者が表を歩行さする時は深き編笠を被りまして人に顔を見せることはならぬといふのは遠山様の皆仰出したのでござりまする罪人が何の様に陳じ立つる者がござりましては粹も甘いも御自分が御承知で居らせられまするから遠山様へ對しましては偽はることが出来ませんに依つて諸事裁判事が早く皆落着に相成りまする扱て長らく引續きましたる五名の人達は皆遠山様の御厄介に相成りまして庄吉勝五郎は吟味中入牢でござります喜三郎花鳥は前回に述べましたる如く八丁堀岡崎町に居りまして話が跡へ戻りまするやうでござりますが大文字屋の番頭から手切れを取りまして投人の春木道齋が何程かの金子を呉れまして何うぞ斯うぞ今日を送つて居りましたが固より無商賈のこと喜三郎は左程の悪人ではござりませぬが連添ふ女房が悪うござりまするから遂に其の氣にも相成ります或る時花鳥は喜三郎に向ひまして「喜三さん喜三、

苦若しくつて仕様がなないねへ尋さうよ世の中に金の無い程辛いことはな
 いが明るい身體なら何んなことでも出来るけれども互に天下晴れて表を
 歩行ことも出来ない位の身體だから何うにも斯うにも仕方がない餘んまり
 苦しいから何時ぞやか前が少し世話になつた槍物町の春木道齋の所へ往つ
 て妾は幾らかお金を借りて来やうと思ふ事止せく以前は旗下だが御家人
 だか知らねへが切離れの宜い春木の先生假令昔し手前が心易くしたにもせ
 よ今更無心に往くといふのは餘んまり氣の利かぬへ話だからア止して呉
 れ甚宜いやアねお前の名前を出しやアしないから妾の一番見で往くんたわ
 ね知らん顔をしてお居でなお前は深いことは知るまいが妾は昔彼の人に少
 しばかり貸してあるお金もあるし世話をしてやつたこともあるから何アに
 因りますと言つたら今何うか斯うかしてえる人だから五十や三十の端金は
 工面の出来ない人でもなからう鳥い渡往つて来るよ甚ア成る丈けなら往
 かずに居るよ然んなに心配をしないでも宜いぢやアないか脊に腹は換へ

られない」と鳥渡小薩張りした絆纏かなんかを引掛け頭髮を搔上げて喜三
 郎の留めるのも聞入れませんで春木道齋の所へ尋ねて参りましたと尋ね
 申しますく「下トロー」と下女が取次に出で参りましたから妾は八丁堀
 岡崎町に居ります喜三郎の家内でございます先生に少々お目に掛りたうと
 ございます宜しく何うぞお取次を願ひます下左様でございますか暫くお登へ
 なさいまし」聽て此女中が書齋に居ります道齋に取次を致しますと尋ね
 、喜三郎の女房が参つた宜いく此方へ案内をして通してやれ下具まりま
 した」扱て花鳥は案内に連れられて奥の書齋へ通りましてお互に顔を見合
 せました十年経てば一昔以前は互に惚合つて命も要らんと思ふ位の仲であ
 りましたが今は其香も醒めて仕舞ひまして甚誠に暫くでしたねへ道ア、何
 うした乃公も鳥渡尋ねてやらうと思つたがハイ寸時の暇もなく尋ねもしな
 かつたが其後喜三郎も来ねへが別に變つたこともないか甚ハイ難有う存じ
 ます先達ては又喜三郎が色々御厄介になりました妾も鳥渡お禮に出るんで

すけれども貧乏いたして居りまして斯んな身装で上るのもお耻しうござい
ますから夫故御遠慮申して居りました道々遠慮には及ばない昔馴染のこと
だからチユイ／＼遊びに来るが宜い何にも稼業でも始めたらチユイ、エ何う
致して御存じの通り明るい所へ出られませんか夫婦が何んで稼業オ、オ、オ
ものかね由しや又堅氣になりましたして小商ひの一つもしやうと思ひまし
資本はなし實に困つて居ります先生誠にお懐かしうございますねへ道々
身共も懐かしく思ひます道併しお前さんぢやア妾も苦勞いたしましたねへ
道昔のことを考へると夢だのう花ハイ夢も醒めましたよオオお前さん位不
實な人はないねへ道不實をしたくはないが其時の場合でのう今となつて見
るとお互に可笑しな話併し何事も纏て若氣の誤り「妾は半へ這入つたり島
へやられたり痛め吟味に掛けられたり石を懐かせられたりしないでも宜い
んだけれどもお前さんの爲に辛ひ思ひを永い間したから餘つ程能く思はれ
なくぢやア合やアしない今運添つて居る喜三郎といふ者にはお前さんと

妾の仲は吉原に居る時に斯ういふ譯だといふことは寢言にも妾は言はれな
いから喜三郎さんは何んにも知らないけれども大音寺前でお前が人殺をし
て追込まれた時に何うぞ助けて上げたかお前はんだつて今町方で召捕られ
ては家の耻辱になるから何うぞ逃して呉れると妾の様な者にお頼みで其時
には此方も惚れて居から自分の身體は何うならうとも可愛い／＼男を助け
てやりたい一心で恐ろしいマア彼の風吹に遊里の中に火を放つて送う／＼
お前はんは逃がしたけれども妾は其儘役場先で召捕られて其筋へ捕はれて
何んな辛い思ひをしやうとも嚴しい調べを受けやうとも白状すれば梅津長
門に頼まれたと言はねばならず左すればお前さんの難義になると思へばこ
そ夢にも存じませんことございますと言張つて送う／＼強情が通つたば
かりで牢名主までして果ては三宅島にやられ本當に永い間苦勞に苦勞をし
ましたよ道々其事を考へて見れば今喜三郎といふ亭主はあるけれども身共
は何うぞ斯うぞ今日マア衣食住には差支へないから何の様にも世話でもし

なければならぬがマア乃公とても老朽ちた年でもなし亭主のある者の所へ近く往つて色々のが若し知れたらば男らしくないと喜三郎が思ふか知らんと夫故存じながら無汰沙を致して居るのだから悪う思つて呉れるな昔の恩は決して忘れねへ忘れないとがあるものかねお前さんのや嘘を吐く忘れつばい人は又と無からう愚痴おことを言ふやうだけれども半の中に居てお前の惚気は悉皆知りました芳町あたりは大層意氣な癖があつたつねへ道夫れも是れも若い時よ道イ、エ妾は年を取らうが老朽ちて仕舞はうが八十九になつても彼の悔しさばかりは梅津さん忘れないよ人を牢に入れて彼んち難儀をさして置いて可哀想だとも思はず自分は勝手に命が助かつたから宜いわといつて女狂ひをして居るかと思ふと妾は牢の中で血の涙を翻しましたよ道然んな愚痴を今言つた所が仕方がない過去つたことだマア酒でも飲むとしやう道イ、エ今日は酒を飲みに来たんちやアないよ困るから御無心に来たんですよ今は最うお前さんには関係のな

い人間喜三郎といふ亭主を持つて居るから何處が何處までも喜三郎の助けになつてやらなければならぬが此處ぞ知邊といふ者もなしお前さんの所にでも来て無心でも言はなかつちやア妾ア合はないからねへ何うぞ時々来るから幾らづゝか用立てゝお呉んなさい道夫れは出来ないうことなら仕方がないが十や二十の端金なら何んな都合をしてなりと拵へてやらう又貴様に縁故がなくつても喜三郎も男だから先生困りますから何うかして下さいと手を下げて来りや乃公も道樂者の交際ひをする人間ぢやアねへが幾らかのことは都合してやらうよ先生唯の者なら十か二十の端金を御無心に來るか知らぬが妾はお前さんの所に夫つばかりの無心には來ないから元談お言ひでない昔のことを考へたら命の親の妾だアね是れから先はお前さんを頼りに言ひ酒でも飲んで面白い思ひでもして三宅や牢で苦勞をした其妾は理合せをしなくつちやア合はないからねへ月々幾らか無商賣で居て贅澤手一杯にして居られる丈けのお金をお前さん妾に仕送つてお呉んさい

道馬鹿なことを言へ乃公だからといつて高の知れた子供を相手に素直をする財産家といふではなし貴様達を贅澤手一杯にさして月々幾らか宛送るといふ程のことが出来ればしてやるが然りやア花鳥無理といふものだ併し悪い所へ往つて歸つて来た爲に恐ろしい重見が變るものだなア然らうさねへ皆んなお前さん達に仕込まれて親孝行な人情の深い極柔しい妾が斯んな者になつたんだから素直をするばかりぢやアあいよ随分悪事に掛けても大先生だからねへお前はなんざア道然んな嫌やなことを言ふなよ然らうたねへ忘れもしない天保二年十二月の二十一日にお前が大音寺前で殺した人は今考へて見れば氣の毒な罪も報いもない沼田の百姓で山住伍平といふ人を金が欲しいばかりにお前さんが殺して二百兩以上の金を取り定めし草葉の蔭でお前さんと妾を怨んで居るだらう道然んなことをお前言ふにやア及ばねへぢやアないか」昔の怨みを存分に言つて言ひ抜うといふので悪黨でも其處が女でござりますから止めても止まりません。……其處が女は好いが

風俗の卑しい奴が来たと思ひまして仲備さのお菊といふ女がフツト庭へ廻りまして小蔭に佇んで何んな話をして居るかといふ一什を立聞を致しますると此菊と申します者は上野の國群馬郡沼田の在農山住伍平の妹計らすも己れの兄が殺されましたことが相分りました此に於て此菊が手續を以て兄伍平の殺されましたのを其筋に訴へ出でます」扱て梅津長門も唯の人間でござりませぬから宜いやうに花鳥を言ひ伏せまして幾何かの金と選はしまして其日は花鳥を返しました金を懐ろへ入れて花鳥は時々来りやア幾らかになると安心を致しまして物町の春木の家を出ましたのが最う夕間暮人の顔も判然見えません彼れから新橋の河岸に出まして松屋橋を渡り八丁堀へ出やうと越中様の窓下まで参りますと見る影もなうボロ／＼た乞食が杖に縋りましてトボ／＼蹠いて参ります氣味の悪い乞食とツツと致す程嫌やな心持が致しますから早く駈抜けやうと急ぎ足になれば此乞食も急ぎ足になり漸う／＼岡崎町の町内に這入りますると好い鹽梅に其乞

食が見えなくなつたから先づ安心をしたと自分の家へ歸つて参ります

第廿五席

花鳥は春木道齋方より歸つて参りまして近喜三さん今歸つたよ其オ、何うした其お金を借りて来たよ其手前又無法なことを言やアしねへか其何アに大丈夫だよ心配おしでない其止せば宜いのに乃公が誠に氣の毒だ其二十五兩包を一つ貸して寄越したが是れんばかりぢやア仕様がなねえ又無くなつたら借りに往くよ其最う止して呉れ無へ時は二十兩でも三十兩でも助からア」之を米屋に拂つて之を店賃にやつてと莞爾くして一杯飲で居る所へ「御免下さいまし其ハイ何誰へ私でございます其此方にお道入り」固より其家住居道入れば直ぐに座敷でヒュイと道入つて来た奴を見ると今道で會ひました例の乞食でござります其ア、誰だねえ此人は……なんだねえお前物貰ひぢやアないか其御免下さいまし」醬油で表めいたやうな手拭を

被つて居りましたが之を取らうとすると思つて疑り着いて居りました容易に取れませんのをメリ／＼はがすやうにして手拭を取り名姐さん斯んな顔になつちまいました其なんだねえ人を捕へて馴々しく姐さんだなんて言つてお呉れでないお前のやうな穢ない兄弟は妾にややないよ其オイ兄弟乃公だ其聞いたやうな聲でもあるが誰れた其姿や形が變つて居るからお前は定めし見忘れたらうが斯んな有様になつちまつたマア見て呉れ分るめへなア産れた時は別々でも死ぬ時は一緒に死のうとお互へに約束をして島を渡つた其若だ何うか其兄助けてお呉んなせえ其ハツ其若……何うしたへ其情けねへマアお前さん達ア達者で斯うやつて居るから目出度へが小其ア斯んなになつちまいました花アマア其若さん何うしたんだへお前だとは妾ア夢にも思はなかつた聲までも變つたねへマア何んていふ願お昇りと言ひたいが……其昇げてお呉んなせへいつが日にも臺の上にあがつたこれアねへ情けねへことにやア何處へ往つても此様ぢやア木賃宿でも

泊めちやア呉れません野に臥し山に臥し或は人の軒の下に寝りやア小磯ね
 へと引摺り起され橋の袂に寝たり喰ふ物だつて碌な物ア喰やアしません兄
 哥昔の友誼にお願へた何うか米の飯を喰はして疊の上で一晩でも宜いから
 寝かしてお呉んなせへ助けてお呉んなせへ登磯ねへの何んのといつて玄若
 なら仕方がねへ併し玄若手前はマア身體一杯に悪い病ひが發したな玄何ん
 だか知らねへが斯んな膿汁に漬けたやうな人間になつちまつた手なんざア
 斯んなに崩れて居るんでござへます夫れよりマア此頭を御覽なせへ膿蓋を
 樂めて拵へた頭見たやうで毛は少しつさやア生へちやア居ません此毛を十
 ムイと抜くと痛くも何んともなく膿蓋が着いて丁度銀見たやうに斯ういふ
 鹽梅しさに取れますんで……在オイ／＼玄若さんはがしちやア不可ないや
 アね小磯い喜何んしろ仕方がねへ玄若手前の其着物ア脱いぢまつて掃溜へ
 でもサラケ打棄つて乃公の浴衣ア貸してやるから湯いでも這入つて來ねえ
 膿汁が少しやア取れやうから湯から歸つたら一杯やらうエウ然うしねえま

「マア助けてお呉んなせへ」 軀て洗濯のしてある浴衣に木綿の拾を重ねて出
 してやり湯鏡と手拭を持たして「玄若裸足ぢやア不可ねへ履物を持つて往
 けまぢやア姉さん往つて参ります」 扱て昔のこととござりますから八丁廻
 おたりは至つて雑間／＼した所で随分昔は貧民の澤山居りました所……
 此處で玄若は自分の着物を脱棄て、仕舞ひました例の腰張りした着物と着
 換へ沐浴を致して是れでマア好い心持になつたと濡れた手拭を持つて例の
 花鳥の所へ歸つて参りました其夜は互に涙を翻して昔語り久振りで言ひ酒
 を飲みましたを喜び夫れから損料蒲團を借りてやりまして其晩玄若は二
 へ寝て仕舞ひました喜三郎と花鳥は下へ床を取つて臥りましたが五ツが
 り四ツが鳴り九ツが鳴り致します中に雨がハラ／＼降出して参ります何
 處ともなく世間が寂と致して居ります喜三郎は何んともなく胸騒ぎが致しま
 して寝られません在お前まだ眼が醒めて居るかへ其今夜ア何んだか知らん
 眠られなくつて仕様がねへ……恐ろしい降りになつたなア其大層降つて來

たやうだねえ喜人間といふものはお互に分らねへもんだかア此方共だつて何うせ邊の上で死ぬる人間ぢやアねへ何時カ悪事を働いた報いで彼んな様になるんだ然りやアさうと玄若は寝て仕舞つたか知らん存本當に以前の元氣はなくなつて何を喰へさしても有難いくとばかりいつて情けない姿になつたねへ喜彼の野郎も随分悪事にやア長けた野郎だけれどもア、爲つちまつちやア仕方がねへ並けれどもマアお互に斯うやつて居る中にアソナ妻の人に飛込まれちやア喜三さん仕様がないうちやアないか喜仕様はねへがト言つて今更構ふことは出来ねへから勝手にしろといふことも出来ねへ夫れに付けても庄吉や勝五郎は何うしたか未だに達はねへが何うかして逢ひてへものた玄若だつて突出す譯には往かねへマア世話の出来る丈けはしてやつて何うせ死滅るときにやア一緒に滅する並けれども何んしろ穢ないぢやアないか」話をして居りますと二階にスヤ／＼寝て居りました玄若はウソ／＼といふなり聲をうなされて居るやアがる並喧ましい畜生だねへ

一重で他人の家だのに寝言なんぞ言はれちやア困るぢやアないかねへ喜ア、堪忍して呉れ……手前位執念深へ畜生はねへ乃公が鳥破りをするのを手前に饒舌られちやアならねへと手前を八丈鉈で擲つたのが生涯の誤りだ不實のやうだけれども手前が足手纏ひになつちやア鳥破りが出来ねへからツイ殺しつちまつたんだが今ぢやア斯んな様になつた玄若だ……何うぞ助けて呉れ……ア、何うぞ助けて呉れ」喜三郎花鳥籠いて二階へ昇つて見ると又スヤ／＼眠つて居ります喜三さん島で女房を殺したことを寝言で言ふんだよ喜厄介な畜生だ隣の人に聞かれても困るぢやアねへか人間落目になつて来ると仕方がねへもんだかア喜ア、助けて呉れ……助けて呉れ……ア、苦しい手前を殺したなア……喜玄若……オ、玄若静にしろ、頭りに蒲團を被せて降りて来たが今は途方に呉れました花鳥と喜三郎互に顔を見合せて喜斯りやアお互に最う永持は無へせ喜喜三さん何うせ死ぬんだ死ぬのは固より覺悟の前だが併し人間と生れて人情だから一時も餘計此

娵婆に居たいと思つても新んな奴が尋ねて来ちやア娵も娵婆にやア居られ
 ない妾ア此奴を殺して仕舞ふよ喜然りやア餘んまり殺生だ離れも氣が附き
 やアしめへ息のある丈け娵婆に置いてやれ吾毎晩新んなことを歌囀られち
 やア娵も追附きやアしない却つて一思ひに殺してやる方が功德になるよ」
 喜三郎考へて見たが成程生して置いてやつても樂しみもなし狭い長家で
 斯う毎晩歌囀られた日には仕方がないといふ意見を起し吾併し乃公にやア
 殺せぬへ吾十一ニ野郎は妾が引導を渡してやるよ」スヤ／＼被れ寝入り
 寝て居る玄若。花鳥は壬生の劍を下から持つて昇りました喜三郎は吾ア
 止せよ」と言ひながら見ても居られませんか下から降りて参ります花鳥は
 玄若に馬乗りに跨つて咽喉のあたりをアツリスウーン」と悶く奴を蒲團を
 被せまして一生懸命に押へて居りますから左のみ大きな聲も立てませす何
 しる被れて居りますから左のみ暴れも致しません其儘に息は絶えて仕舞ひ
 ました纏て喜三郎は昇つて参りまして吾息の根を止めたか吾すつかりとや

つて仕舞つたよ喜南無阿彌陀佛／＼喜然んな氣の屈いことをお言ひでない
 喜玄若や堪忍して呉れ遅かれ早かれ乃公も死ねんた何うせ手前や乃公は極
 樂に往く氣遣へはねへ地獄で逢つたら謝るから勘辨して呉れ……然りや
 うと死骸は何うする吾何處に打棄やらう喜乃公も往うか吾何アに河で澤
 山だアね」血の垂れぬやうに蒲團に悉皆りくるみまして其上に吳座を巻
 まして細で結へ吾手前獨りぢやア覺束ねへ乃公も一緒に往うと最う唯今の
 二時昔の八ッでござります兩人で之を背負ひ出しました岡崎町。鼻を摘ま
 れますのもしれません眞の闇雨は抜けるやうに降出して参りました是れ申
 ひと松屋橋まで参り橋の上から死骸を打込んで兩人は歸ります其夜寝
 参りました人は其筋のひと相見え兩人の舉動の怪しい所から近邊の風説を
 聞き翌日喜三郎花鳥は召捕に相成りまして悉々嚴重にお調へがかりまし
 たから最早包み隠すことが出来ません此に於て兩人共お差送りに相成りま
 した扱て最早是れまで申上げますと二度の裁判は些と重複うとさやます

し殊に私共の方では不得手でございますから……是れで大概結局は着きま
 したが喜三郎は又々半名主を致しまして花鳥は遠山様のお調へを受けまし
 たる時に島破りの節島司壬生大助を殺したことは喜三郎に頼まれたとの
 で私は何にも存じませぬと申立てたる爲に悉く遠山様のお悪しみを受けま
 した其處で誣込み訴訟に及びましたる庄吉勝五郎、庄吉は仙島を破りまし
 て寝庭重左衛門殿に又か召捕になりまして三宅島に参つて島破りを致した
 ので是れは重罪にて死刑勝五郎は無實の難とは申しながら島破りを致し三
 日でも親と名の附いたお熊婆アを殺し重吉を殺しましたに依つて是れも死
 刑でござります花鳥も死刑に行はれます梅津長門は自宅にてお召捕りに相
 成りまして透一服罪いたしましたるに依つて是れは半獄に於て切腹でござ
 ります残らず死刑に行はれましてござりますが喜三郎一人残りました是れ
 は半名主を致して居りましたが至つて喜三郎は獄中に居る者に教育が好ま
 るござります此傳馬町の半辨ひといふものは近火の節でござりますが三日が

御定法で切解きに相成ります三日目に歸りませんと科人は悉く科が重くな
 るさうでござりますすけれども残らず三日目にナヤンと歸るといふ者は皆ま
 ではござりませぬ何れへか逃亡する者が多ござります其半辨ひの時に半名
 主の喜三郎は病氣でござりまして深川相川町に居ります網打ち金太郎方へ
 願つて参りましたして二階に厄介に成つて居りましたが三日目に歸ることが出
 来ませぬ。すると切解きに相成りましたる科人一同運割なく歸りまして一
 同から喜三郎は病氣でござりするから何卒我々一同此通り歸つて参りま
 したるに依つて喜三郎は大病のこと故か慈悲を願ひたいと半屋係りの役人
 に願つて出でましたに依つて遠山左衛門尉様にお届けになりますともとも
 と遠山左衛門尉様は苦勞人で居らつしやるからして表向とうといふ譯にも
 参りませんに依つて喜三郎一人はお眠こぼしてござります。する中に喜三
 郎は深川相川町網打ち金太郎方にて疊の上にて於て没しましたが此網打ち金
 太郎が懇ろに野邊の送りを致しました唯今も喜三郎の墓は佐原の上宿法戒寺と

いふ寺に歴然と残つて居ります此五人の中で全く塵の上で死にましたのは
 喜三郎一名でござります是れで永らく引續きまたしる佐原の喜三郎も結局
 と相成りましてござり升眞に御退屈

佐原の喜三郎終

明治三十一年四月十五月初版印刷

明治三十一年四月廿五月初版發行



編輯發行
兼印刷者

東京市日本橋區通堂一丁目十七番地
青木恒三郎

印刷所

大塚市西區土佐堀三丁目三十八番地
嵩山堂印刷部

發賣所

東京市日本橋區通一丁目
青木嵩山堂

全

大塚市東區心空橋通一丁目
青木嵩山堂

賣捌所

野州四日市市
嵩山堂支店

ちの浦六著
海賊 二冊 正價金廿五錢
郵税六錢

機能の非立は用なけれど、浪六氏が断たに能を
振はれし近來の傑作、凡そ古今の小説に女と云
ふもの肝要なから、この小説に一切女情なし
の全編、さうして婦人方も讀まざるに居られぬ味
の骨に染むべし。

ちの浦六著
草枕 二冊 正價金廿五錢
郵税十二錢

奇蹟傳説の筆を變術に走せて皮肉的の文字に風
合の風浪を流し、その間に一種の哲生を投して
時に南直の學生となり、時に風流才子となり、
時に小説家となり、時に政治家の志士となり千態
萬狀の人生行路を最後の大悟に歸ふるもの。

ちの浦六著
魚屋助左衛門 正價金廿五錢
郵税六錢

三百年の昔、文祿年間、身は長州堺の一町人なが
ら四海の戦亂を兎戯に比して別に志を遠く海外に
馳せ、萬里の波濤を颯て海國男子の一大篇を組み
日本國の外に已れ帝王たるの地を求めしも、惜い
義事聞はれて豊太郎に誘はれられし快丈夫が平生
の面目を寫せるもの。

ちの浦六著
呂宋助左衛門 正價金廿五錢
郵税六錢

魚屋助左衛門が呂宋を討つて歸りし後、再び南洋
渡航を企て、豐太郎の難役に進ひしまで、いはゆる
斯の快男子が後の半生を寫せるものにして骨鳴
り肉動くの快事に鬼哭し神泣くの情事を併せ、以
て讀者に一片の甲斐を出さしむる慘愴悲喜を極む

ちの浦六著
古賀市 一冊 正價金廿五錢
郵税六錢

一道稜層の快骨を叩いて闇黒世界に百代の光明
を照らしむる目目、一本の竹杖に纏りて現
はれいでし面目、花の如き少女が之を扶けて涙
の淵に身を投げし悲愴慘愴の文字、あはせて紙
背に散せり。

ちの浦六著
大坂城 一冊 正價金廿五錢
郵税六錢

古今の一人豊太郎が驚きおびたる日本一の名城
に、さきし慶長元和の昔をしのんで血に泣く獨
んの老武者が、一將の功も成らず萬卒の骨また
枯れし瀟瀟の涙を、無情の草木に注ぐ屆の懺悔
傳説、浪六子の筆に上りて如何なる文章を寫せ
しや。

ちの浦六著
鬼あざみ 正價金廿五錢
郵税六錢

金殿頂樓の夕に眞砂く、白頭草花の曉に美玉多し、
よき衣着たる人何ぞ母からむ、早き樂するもの何
ぞ早むべきと、浪六子快風むらぐ、馬方船頭赤乳
の人と云へる誰の餘りひたことなりとて船頭は海
賊に於て義膽を示し、此篇は馬方の快骨を著はす
やがて何れの日か赤乳の人の出版あるべし。

ちの浦六著
増征清軍記 クロス製金文字入
一冊 正價金六拾錢
郵税拾四錢

本書は明治初年日清韓三國の交際より廿八年開戦
以來平和條約批准交換迄の海陸陸戦及び戰事に於
ける猛將勇士の美談逸話等に至るまで詳記しなれ
ば尋常一編の戦記にあらざして實に千秋子孫に傳
ふべき一大珍書なり。

幸田露伴子著
小説 船一冊 正價金廿五錢
郵税六錢

露伴氏の著作の常に讀むもの、血をして熱せしめ心をして昂らしめ情をして激せしめ涙をして湧かたらしむれば此篇ハ意外にも可憐可愛の美少年と美少女とを點出して其世世の汚穢に未だ接せざるどころの清新和平の心より發する其情愛を描けるものなり

幸田露伴子著
小説 ひより麻一冊 正價金廿五錢
郵税六錢

さくらの渡松の怪傳の如何に、彼の久四郎が身の上の何と成るべきか、毎屋の正太郎の何と成るべきか、又其妻の如何に成るべきか、想を俱みと馳みどが三つ巴結の如く廻り廻る末の收まりの何と成るべきか、これ等の疑く本書にあり

幸田露伴子著
小説 瀧松一冊 正價金廿五錢
郵税六錢

男子生るれば父母即ちこれがために買わらんと願ふものなり、されば人誰か一生を迎へてやむるべき、此篇ハ妻を迎へんとするもの、先づ一服して一考すべし、また御妻主君を主眼する者も必ず先づ一服して再考すべし

幸田露伴子著
小説 雲の袖一冊 正價金廿五錢
郵税六錢

此篇此の母子追慕無残の境遇を叙し來りて、忽然として神懸不思議の森羅地獄十郎宗正と云ふ一流を現出し、十郎が世子の厄を解くと、宗正の情仇を爲りておごのと益離隔する、而して十郎去りて往く所を知らざるに終る、局面愈錯綜奥意雄大なり

幸田露伴子著
五重之塔 正價金廿五錢
郵税六錢

篇中一個の惡徒小人なく、皆愛す可く親むべく敬ぶべく愛すべき人のみなり然るに不可思議にも或者の怒りて人を殺さんとし或者の怒みて人を死せんとし、狂瀾起り驚濤卷き衝突、又衝突奇事異變忽生の激滅、讀むものをして眩暈し心迷ひ眼縁に暇わらざらしむ

幸田露伴子著
勇魚捕前編二冊 正價金五拾錢
郵税十二錢

心強く噴火き一少年の伊勢参宮を思ひ立しより一生奇異の運命に遭遇し或時ハ主わる女に想を懸けられ或時ハ吾妻に欺かれ或、漸ちて死せんと欲し或ハ呪りて殺さんと欲し、七瀬八倒の境界を經過して終に心安く身泰き老翁となるに至る永物附り

山田美妙著
武者魂 正價金廿五錢
郵税六錢

常文一政を捨て一種の調和文、物語ハ實話正徳天正の頃天眞爛漫たりし日本魂の武者氣貫、寫し出して懸壯勇躍、紙上の光彩旭日櫻花の如し

山田美妙著
俠男兒 正價金二十五錢
郵税六錢

これ利を主とする一商人の身に過ぎざれと行跡ハ俯仰天地に愧ぢず、天川屋平八男でござるとい、三ツ子も承知の俠男兒、本筋にて一層其男前を磨き上げぬ

白玉蘭 正價二十錢
郵税四錢

葛のうら葉 正價十錢
郵税四錢

家園の二葉 正價十錢
郵税四錢

岩松藤博士著
谷間の姫百合
 全一冊
 正價 金八十錢
 郵税 十八錢

本書は英國貴族の公子卑しき少女にかいまみてよりまがつみ一身に集り遠く伊太利に流遷し浮世盛衰事ハ三代に渡り其間の人情風俗ハ英人の家庭氣質を見るべく本書なるや長多くも乙夜の覺を賜うたる珍書なり

東海散史柴四郎著
佳人之奇遇
 和装本時裝本
 全一冊
 正價 金四十錢
 郵税 三十二錢

本書出る毎に文界を驚動せしめ紙價爲めに貸く斯に漸く完成を見るに至る幸に舊作の愛讀を祈る
 本書一冊分、分装一ヨリ十迄二冊ニ付實價五十錢郵税六錢、十ヨリ十六迄二冊ニ付實價六十錢郵税六錢

奴之助著
伽羅少年
 正價 廿五錢
 郵税 六錢
岩鉄狂禪
 正價 廿五錢
 郵税 六錢
八十氏川
 正價 廿五錢
 郵税 六錢
つゞれの錦
 正價 廿五錢
 郵税 六錢

まかり出たる奴之助の浪六子の高弟、よく三日月時代の文を寫して其ま、初陣につん出たるハ、剛健なる樹の下、ふんと床しき伽羅少年、次ハ石火光中笑ふて身と作り、閃電機裏に端倪を辨せし伊治もなく、クルクと頭圓めしハ、浮世うるさしとの道心にあらぬ入道岩鉄、經營情懷なる八十氏川の姿こそ日本無双の無男なれ心ハ麗則珠玉、病める母に仕へ兄弟、實なれと絶群の賢母何れ歎に靈身のつゞれの錦

江見水陸
利根の船歌
 遠山かすみ
田毎源氏
 大軍艦
海底の錨
 女の顔切
朝嵐
 木津の篝火

何れも洋装繪本
 東京畫伯諸大家
 挿畫奉書極彩色入
 每冊特別正價金
 二十五錢郵税六錢

無名氏著
萬年娘
 松居松葉著
金賣吉次
 武田仰天著
源三位
 好男子
 武田仰天著
局松嶋
 村松柳江著
雪の花細
 全
細川櫻

何れも洋装繪本東京畫伯諸大家挿畫奉書極彩色入
 每冊特別正價二十五錢郵税六錢

漢書詩學和歌畫譜書目摘要

歷代詩學精選
高青邱大全集
白樂天詩集
陶淵明詩集

正價四十五
郵稅四
正價四十五
郵稅四
正價四十五
郵稅四
正價四十五
郵稅四

八史略獨學自在
文章軌範獨學自在
書大字上本
經大字上本

正價六十五
郵稅十八
正價五十五
郵稅十二
價一圓七十
郵稅四十四
價一圓七十
郵稅四十四

都名所畫譜
山水畫譜
人物畫譜
花鳥畫譜

和裝映入二冊
正價十四
郵稅四
正價十四
郵稅四
正價十四
郵稅四
正價十四
郵稅四

類題草野集
類題怡野集
桂園一枝

價四十五
郵稅十二
正價十二
郵稅四
正價十二
郵稅四

字書習作文作書字目摘要

新撰會玉篇大全
新撰會玉篇大全

五書大字典
五書大字典

新撰作文活法
新撰作文活法

眞書千字文
眞書千字文

普通手紙之文
普通手紙之文



要摘目書理科花生、畫漢、碁圍

井上慎遊編
初學全書 正價八錢
碁新報 正價二十錢
碁捷徑 正價四錢
格伍定石集 正價十五錢

漢語獨稽古 正價七十錢
竹田畫譜 正價十五錢
南畫指南 正價十五錢
雲山畫譜 正價四錢

風流庵宗匠編
獨習自在 正價十六錢
中島存如著
獨習自在 正價四錢
築山庭造法 正價十五錢
培養全書 正價三十錢

岡本純先生著
獨案內 正價十二錢
西洋料理方 正價十五錢
山田恒七著
即席庖丁 正價五錢
漬物鹽加減 正價二錢

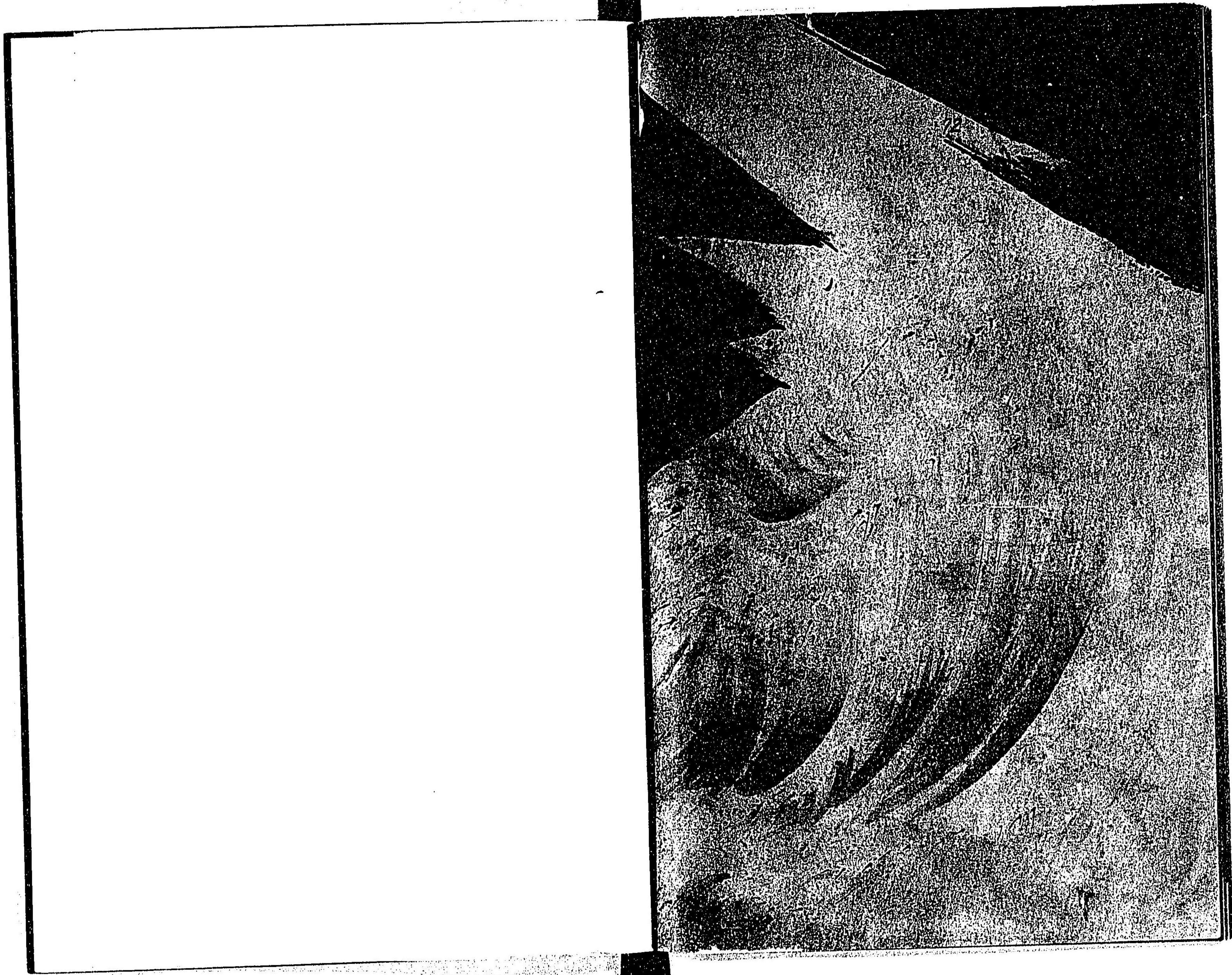
要摘目書樂音

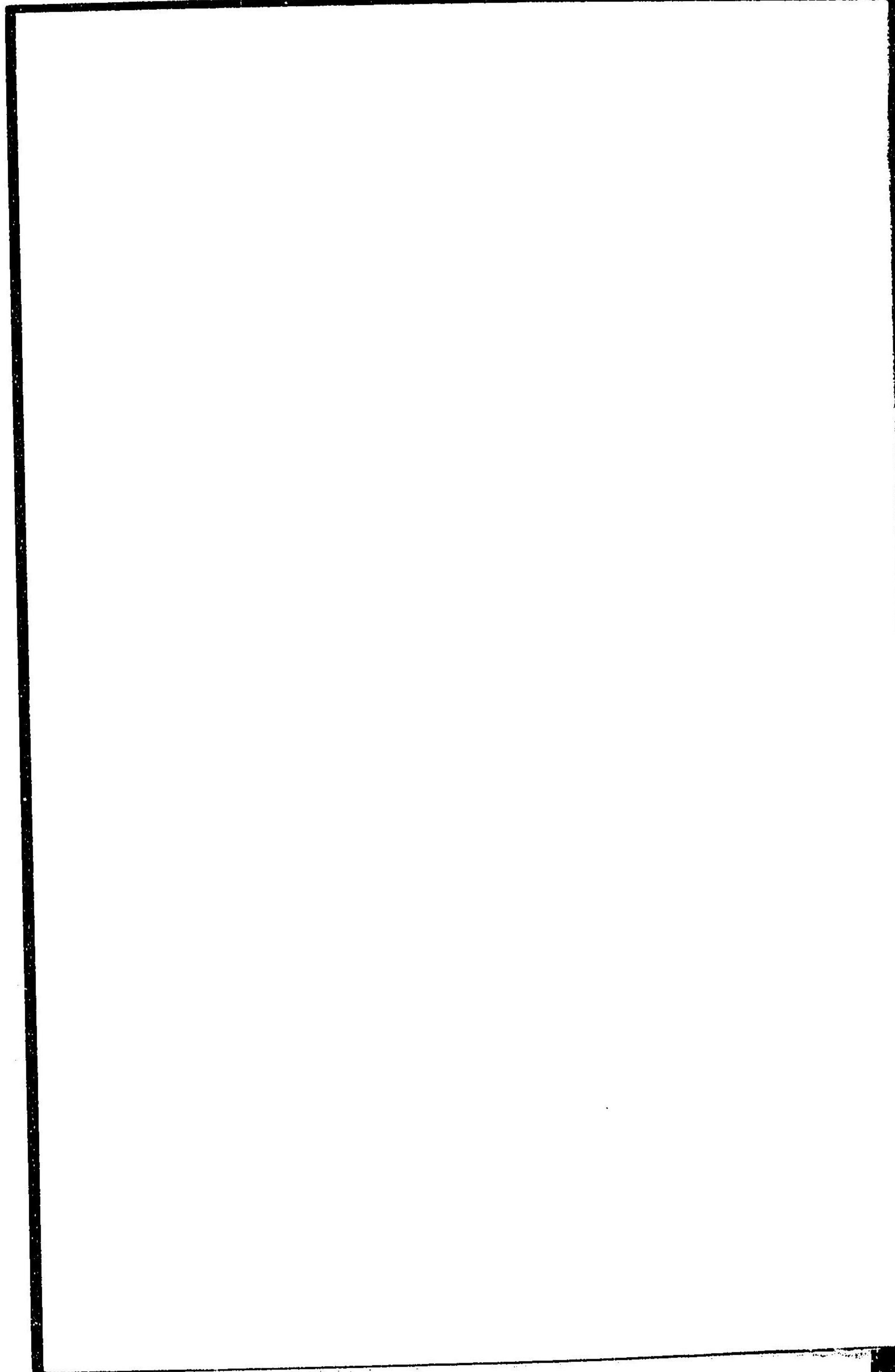
藤野元春先生著
尺八獨習之友 正價十五錢
全第一集 正價十五錢

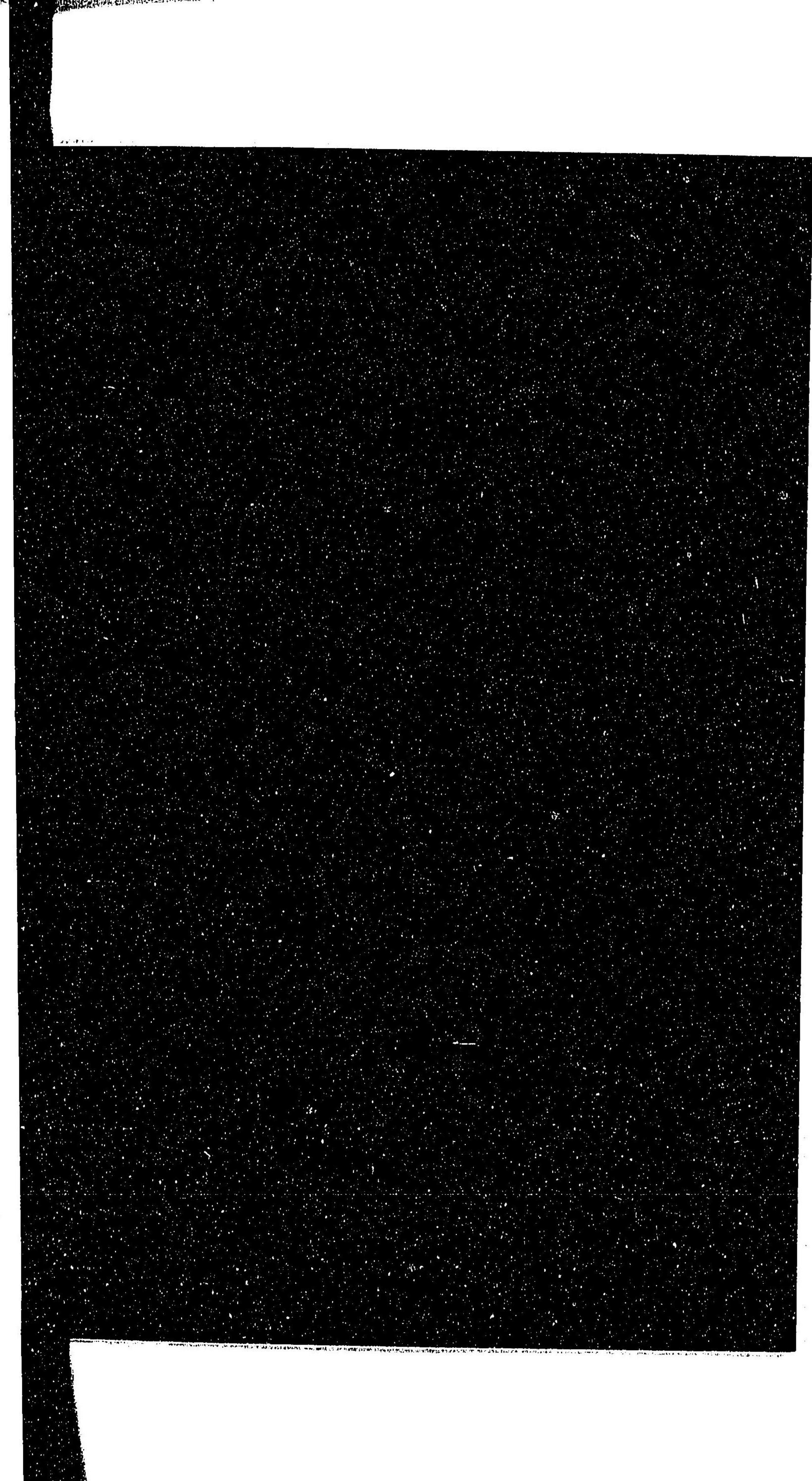
藤野元春先生著
尺八獨習之友 正價十五錢
全第二集 正價十五錢

菅尾竹軒著
尺八獨習之友 正價十五錢
新日本俗曲集 正價十五錢

義太夫傑作集 正價十四錢
萬葉玉手箱 正價十二錢
日本魂 正價三錢







特8

861

佐原の喜三郎

柳枝

国立国会図書館

097991-000-7

特8-861

佐原の喜三郎

春風亭 柳枝/口演

M31

DBT-0184

